法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

世界市場の具体的・歴史的性格について

岡田, 裕之 / OKADA, Hiroyuki

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
30
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
115
(終了ページ / End Page)
171
(発行年 / Year)
1962-10-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008298

世界市場の具体的・歴史的性格について

岡田裕之

一、資本制生産様式の歴史的前提としての世界市場

世界市場の具体的・歴史的性格は一般の認めるところであり、この性格そのものについては、あらためて強調するまでもないことである。ところが、世界市場のこの性格の承認から、世界市場の理論的再構成に関して相反する見解が生ずるのであって、一方の論者は、その理論的再構成は不可能であるとし、他方の論者は、その理論的再構成をなすべきである、とするのである。(1)

こゝで世界市場の理論的再構成とは、いうまでもなく、マルクスが『経済学批判』序説において、経済学の正しい方法として敍述した事柄を意味するのであって、それは周知の箇所であるが、問題を明かにするために、はじめに採録しておかねばならない。

「第一の道は、経済学がその成立の過程で歴史的にとった道である。たとえば、一七世紀の経済学者達はいつも生きた全体、すなわち、人口、国民、国家、多くの国家、等々からはじめた。しかし、彼等はいつも、分析によって二三の規定的な抽象的一般的諸関連、たとえば分業、貨幣、価値、等々をみつけ出すことに終った。これらの個

個の要因が多少とも固定され抽象されるや否や、労働、分業、欲望、交換価値のような単純なものから、国家、諸国民間の交換、そして世界市場にまでのぼっていく経済学の諸体系がはじまった。このあとの方法は明かに科学的に正しい方法である。具体的なものが具体的であるのは、それらが多くの規定の総括だからであり、かくして多様なものの統一だからである。だから思考においては具体的なものは総括の過程として、結果としてあらわれ、出発点としてはあらわれない。たとえそれが現実の出発点であり、したがって直観と表象の出発点であるとしても。」(Grundrisse, S. 21～2)

マルクスのこの叙述に依って、世界市場の理論的再構成を不可能であるとする説を〝異説〟として斥けることは容易なことではある。だがこうした断定は経済学の進歩に役立たないし、またそれによって理論的に再構成すべきだとする説の不正確な根拠が正当化されるわけでもない。我々は、世界市場の具体的・歴史的性格を単に言葉として承認するだけではなく、そこからすゝんで、それがいかなる意味において具体的であり、いかなる意味において歴史的であるか、を問わなければならない。いかなる意味において具体的・歴史的であるかゞ明かにされなければ、世界市場の理論的再構成に関して結論を得ることはできないし、また、〝具体的・歴史的〟と形容してみたところでそれは無内容な修辞でしかないであろう。

この具体的・歴史的性格の意味を明かにするために、我々は世界市場の具体的・歴史的性格を承認する上で重要な一典拠とされている、国外市場の歴史的性格に関するレーニンの『ロシアにおける資本主義の発達』――以下『発達』と略す――における敍述の検討からはじめたい。[2] 中心的に問題となる箇所は次の如くである。

「資本家国にとっての国外市場の必要は、社会的生産物（およびとくに剰余価値）の実現の法則によって決定さ

れるものではまったくなく、第一に、資本主義がたゞ国家の境界外に出るところの広汎に発展した商品流通の結果としてのみ現われるということによって決定される。故に、外国貿易なき資本家的国民を考えることはできない、しかしてかゝる国民もまだ存在しない。諸者のみる如く、この原因は——歴史的性質のものである。……

第二に、社会資本の再生産の理論によって必然的に前提され、しかして実際、たゞ幾多の絶えまなき動揺の平均的大いさとしてのみ設定されるにすぎないところの、社会的生産の個々の部分の間の適合（価値ならびに自然的形態よりみての）、この適合は、資本家社会においては、未知の市場に向って働きつゝある個々の生産者の孤立性のため、絶えず破壊される。相互に『市場として』役立つところの種々の産業部門は、均等に発展するものではなく、相互に追越し合う、しかして一そう発展した産業は国外市場を求める。……

第三に、前資本家的生産方法の法則たるものは、従前の規模における、従前の基礎上における生産過程の反復である。すなわち、地主の賦役経済、農民の現物経済、工業者の手工業的生産がかゝるものであった。これに反して、資本家的生産の法則たるものは、生産方法の不断の革新と生産規模の無制限的拡大である。旧来の生産方法の場合には、経営単位は性質からみても規模からみても変化することなく、地主の世襲領地、農村の村落もしくは農村の手工業者および小工業者（いわゆるクスターリ）のための小さな附近の市場の限界を出ることなく、幾世紀も存続することができた。これに反して、資本家的企業は、不可避的に、土地共有体、地方市場、州、それからまた国家の境界をこえる。しかして国家の孤立性と閉塞性はすでに商品流通によって破壊されたから、各々の資本家的産業部門の自然的傾向は、それらを国外市場を捜索する必要へと導く。かくの如くにして、国外市場を捜索する必要はナロードニキ派＝経済学者達が好んで描出するように、決して資本主義の破産を証明するものではない。まっ

たく反対である。この必要は、経済制度の旧来の孤立性と閉塞性（したがってまた精神的および政治的生活の狭隘）を破壊するところの、世界のすべての国を単一の経済的全体へと結合するところの、資本主義の進歩的、歴史的働きを明白に示すものである。

我々はこれによって、国外市場の必要の最後の二つの原因がまたしても歴史的性質の原因であるのをみる。それらを考究するためには、各個の産業部門、国の内部におけるそれの発展、資本家的形態へのそれの転化を研究しなければならない。――一言でいえば、国における資本主義の発展の諸事実を取らなければならない、……」[3]

もちろん、レーニンは、こゝで世界市場を理論的に再構成すべきであるとも、すべきでないともいっていないし、それが可能であるとも、不可能であるともいっていない。[4] こゝで彼が、国外市場（あるいは外国貿易）の歴史的性格について主張していることは確認されるのであるが、あらかじめ念頭におかねばならないのは、『発達』の本来の主題は〃ロシアにおいて資本主義のための国内市場はいかに形成されつゝあるか〃ということであって、世界市場に関連しては、彼は、ロシアにおける資本主義の不可能を主張するナロードニキを批判し、実現の問題に国外市場（あるいは外国貿易）を持ちこむ彼等の誤謬を指摘し、それに附随して、国外市場（あるいは外国貿易）の歴史的性格について述べたにとゞまる、ということである。[5] すなわち、『発達』の主題は本来世界市場ではなかったのであって、この点においては、彼の後の著作『帝国主義論』とその性格を異にしている、ということを注意しておく必要がある。

しかし、右のことを念頭においたとしても、国外市場（あるいは外国貿易）の歴史的性格について彼の述べた事柄には、世界市場に関する重要な論点が含まれている。引用箇所中にある三つの項目の指摘は、彼自身が区別するように二つの論点――第一論点（第一項目）第二論点（第二項目および第三項目）――に分かたれる。すなわち、その第

一の論点は、資本制生産がその下で発生する世界市場の歴史的性格に関連し、第二の論点は資本制生産の作出する世界市場の歴史的性格に関連する。この論点の区別は後にみるように重要なものである。

我々ははじめに、第一の論点――彼が「資本主義がたゞ国家の境界外に出るところの広汎に発展した商品流通の結果としてのみ現われる」という場合の世界市場の歴史的性格――に注目したい。

資本制生産がただ国家の境界外に出るところの広汎に発展した商品流通――世界市場――の結果としてのみ出現した、ということは歴史上の事実であるが、さて、この歴史上の事実は生産関係上のいかなる関連を表現するものであろうか。

商品交換はその歴史的発生からいって、共同体の内部でまず発生したのではなく、共同体と共同体の接触から生じた。そしてこうして生じた商品交換が共同体内部の商品交換をもたらすのであるが、もちろん、かゝる商品交換は歴史上古くから行われていたのであり、「商品交換は一切の書かれた歴史以前に横わる時代――エジプトでは少くとも紀元前二五〇〇年乃至五〇〇〇年にさかのぼり、バビロニアでは紀元年五〇〇〇年乃至六〇〇〇年にさかのぼる時代――からのもの」(Das Kapital Bd. III, S. 34~5) とエンゲルスのいう如くである。生産物の商品への転化、商品交換は商品の商品と貨幣とへの二重化を生ぜしめ、かくして形成された貨幣がまた商品流通を促進する。だが、この単なる商品流通はその形成と維持、徐々たる発展の全歴史的過程を通じて、伝来の生産諸関係を自らの前提として維持するのであって、決して生産物を全面的に商品に転化せしめることはなく、商品流通はいわばたゞ〃社会経済の表面において、部分的に〃存在するにすぎない。もちろん、商品流通の発展、貨幣財産の集積は多少とも旧来の諸生産様式に対して解体的作用を及ぼすのであるが、それらを根底から覆すことはないのである。

商品流通の漸次的発展、商業、世界商業の発展、新大陸や新航路の発見等々は遂に世界市場の形成をもたらしたのであるが、商品がもともと「それ自身宗教的・政治的・国民的・言語的なすべての障壁を超越している」(Kritik, S. 164) ということは、この商品流通に当初から国際的性格を持たせるのであって、世界市場の形成を本格的な意味でいうためには、ようやくアメリカ大陸の発見、インド航路の発見等々をまたねばならぬとしても、商品の国際的交換は歴史上のどの段階においても見出すことができるのである。この意味においては、外国貿易は古代社会にも中世社会にも存在したといって差支えない。

しかし、すでに明かなように、この商品流通はつねに資本に先行する生産諸関係——先資本制的な、あるいは前資本制的な生産諸関係——を自らの前提として維持するのであって、たゞ生産物の過剰部分の商品への転化がそこに存在しているにすぎない。マルクスが「商品流通は資本の出発点である。商品生産および発展した商品流通——商業——は、その下で資本が成立する歴史的前提をなす。世界商業および世界市場は一六世紀において、資本の近代的生活史の扉を開く。」(Das Kapital Bd. I, S. 153) という場合、この世界市場は資本制生産に先立って形成されるところの世界市場である。この世界市場は資本の歴史的前提であっても、いまだ資本の作出するその産物ではない。

あらためて説明するまでもなく、資本制生産の発生のためには、多少とも発展した商品の流通および貨幣財産の集積の存在のみではまったく不充分であって、直接的生産者の生産諸条件からの剝離、土地所有の独占と労働力の商品としての市場への登場がなくてはならない。資本制生産が確立するや、それはこれらの諸条件・諸前提を自ら作り出すのであるが、資本制生産のそもそもの発生のためには、これらの諸条件・諸前提が歴史的に与えられたものとして存在しなければならないのである。

世界市場のそもそもの形成――あるいは、始源的に形成せられたる世界市場は、だから、資本の歴史的前提であって、その結果ではない。資本はその発生の以前に[6]形成されるべき歴史的前提を、自らの結果として措定することはできない。この歴史的前提は、いうならば、先資本の諸条件を、資本の非存在を前提として形成されたのである。マルクスは資本の歴史的前提について次のようにいっている。

「たとえば、農奴の都市への逃亡が都市制度の歴史的諸条件および諸前提の一つであるとしても、それは決して完成せる都市制度の現実性の条件でもなければ契機でもなく、すでにその過ぎ去った前提に、その定在のうちに止揚されている、その生成の諸前提に属するのである。資本の生成の、資本の発生の諸条件および諸前提はまさに、資本が未だ存在しないことを、はじめて生成することを前提とする。それらの諸条件および諸前提は、かくして現実の資本によって、それ自身自らの現実性から出発して自らの現実化の諸条件を措定する資本によって消滅する。」(Grundrisse, S. 363)

だから、資本の本性の結果ではなく、また資本の非存在を前提とするところの、始源的に形成せられた世界市場を、経済学は理論的に再構成しえないし、またすべきでもない。それは資本制生産様式の歴史的前提の一つとして、資本の発生にとってきわめて重要な意義を持つにせよ、結局は、《単なる歴史》上の一範疇にすぎないのである。たしかに、経済学は資本制生産様式という歴史的に特殊な一生産様式を取扱い、かくして歴史を取扱うのであるが、それは決して、資本の歴史をその序列に従ってそのまゝ〝理論化〟するものではない。経済学は歴史的に特殊な、自立的な一生産様式としての資本を取扱うのであり、その内的諸関連に従って叙述を展開するのである。

「経済学的諸範疇を、歴史上それらが規定的であった順序にならばせることは実行もできないし、またまちがい

であろう。むしろそれらの範疇の序列は、それらが現代ブルジョア社会のなかでおたがいに対して持つ関連によって規定されるのであるが、この関係たるや、それらの範疇の自然的な関連としてあらわれるものの、または歴史的序列に照応するものの、まさに逆である。……問題なのは現代ブルジョア社会のなかにおける経済的諸関係の組み立てなのである。」(Grundrisse, S. 28)

この観点からするならば、資本の歴史的前提は経済学の理論的に再構成すべき対象となりえないのである。

「資本主義がその結果としてのみ現われる」ところの世界市場は、明かにこの資本の歴史的前提に属するものである。この関連においては、世界市場の歴史的性格は自明であり、その《単なる歴史》の歴史的性格の故に、それは理論的に再構成しえない対象にとゞまる。

だから、世界市場をこの関連においてみる限り、世界市場を理論的に再構成しようとするマルクスのさきの主張は不条理だ、ということになってくるのは当然である。それにもかゝわらず、一方ではレーニン『発達』の引用部分の第一論点において想定されている世界市場を思いうかべながら、しかも他方ではマルクスの『経済学批判』序説の命題に従って、なおそれを理論的に再構成すべきだとするならば、経済学は〝資本制生産の歴史過程をそのまゝ理論化すべきだ〟とする、無理な、しかも誤った結論に達することになるであろう。(7)

経済学が資本の前提を取扱うのは、それが単なる歴史的前提ではなく、本来の前提である限りでである——換言すれば、資本がそれを自ら措定し、それに自ら根拠を与えるところの前提である限りにおいてゞある。この前提の措定によって資本は自立的な生産様式として自己を維持し、再生産することができるのである。商品流通を生ぜしめ、労働力を商品化せしめる始源的過程は、たしかにその下ではじめて資本が発生してくる過程であるけれども、それは資

本関係維持のためにつねに必要な前提ではない。もし資本関係の再生産のために、繰返して先資本の諸条件下に形成される諸前提が必要であるならば、総じて資本は自立しえずかつ自ら再生産しえない。もし資本が、資本に先行する諸条件の下に形成される諸前提を、つねに自己維持のために不可欠のものとして必要とするならば、いかにして資本は、一つの自立的生産様式として歴史的に特殊な生産様式でありえようか。

だから、資本制生産の確立は、最も基礎的には商品流通および労働力商品の資本自らによる措定においてとらえることができる。資本は自らの前提を自ら措定することによって自己を維持し再生産する。これによって歴史的前提は《単なる歴史》上の過去におしやられるのである。マルクスはこの関連を次の如く表現している。

「始源的にはその生成の諸前提として現象したところの——かくして未だその資本としての行為からは発生しなかったところの——これらの諸前提は、いまやそれ自身の現実化の結果として、現実性として、資本によって措定されたものとして——資本の発生の諸条件としてではなく、その定在の諸結果として現象する。資本はもはや生成するために諸前提から出発するのではない。資本はそれ自身前提されているのであり、自らから出発してその維持と増大そのものの諸前提を創造する。」(Grundrisse, S. 364)

資本の諸結果としての資本の諸前提の措定は資本の確立であるが、この確立した資本からみるならば、その発生の歴史的前提は過去の前提、過ぎ去った前提である。この歴史的前提に関しては、経済学はそれをたゞ過去として、《単なる歴史》として回顧するにすぎない。

労働力の商品としての市場への登場をとってみよう。はじめはこれは、あらためて説明するまでもなく、始源的蓄積の結果である。けれども、一たび産業資本を前提とするならば、一方では、労働者は労働力商品を販売して得た労

賃（これは労働者の最低生活維持の水準にある）を支出し生活を維持するならば、ふたゝび彼は彼の労働力を市場に投じなければならないのであり、他方、生産手段所有者たる資本家は増殖した価値を貨幣として保持しているのであって、彼は貨幣をふたゝび資本として投じ労働力を購買する。資本は資本家階級とともに労働者階級を再生産する。労賃は労働者階級の世代の再生産に必要な部分も含むから、この再生産は幾世代にもわたるものである。さらに資本の作り出す相対的過剰人口は、労賃の労働者の生活最低水準への圧し下げの、そしてまた資本の蓄積衝動の充足の不可欠のメカニズムをなす。労働力の商品としての市場への登場のためには、すでに資本の歴史的前提の定在を必要としない。商品流通も同様である。資本は商品流通を前提とするばかりでなく、それを不断に更新し維持する。したがって商品流通を考察するのに、あらためて共同体と共同体の接触にまでさかのぼる必要はないのである。

始源的に形成せられたる世界市場は資本制生産の歴史的前提の一つとして、経済学にとって《単なる歴史》に属するものであって、かゝるものとして、その歴史的性格を確認することができる。だから、この歴史的性格は理論的再構成を可能ならしめないところの歴史的性格であって、この関連における世界市場を問題とする限り、その研究は歴史的諸事実の事実的研究に委ねる以外にない。

しかしながら、世界市場が資本制生産様式の歴史的前提である限りは経済学の本来の対象をなしえない、ということは、経済学が、たゞ資本にのみ固有な世界市場を理論的に再構成しえないし、またすべきでもない、ということを意味するものではない。マルクスは世界市場を経済学の本来の範疇とみなしているのであって、我々はこの世界市場の具体的・歴史的性格を問わなければならないのである。もちろん、このように主張したとしても世界市場がそれぞれ別個に二つ存在するのではない。そうではなく、こゝで資本の歴史的前提である限りでの世界市場と、資本に固有

な世界市場を区別するのは、その定在のうちに歴史的前提を止揚しているところの、資本の作出するところの、資本の必然的産物としての世界市場こそ問題とすべきであって、始源的に形成せられた世界市場の《単なる歴史》としての性格から、経済学の本来の対象であるべき世界市場の具体的・歴史的性格を同一のものとして、単純に推論すべきではないことを強調しなければならないからである。

我々は、『発達』におけるレーニンの第一論点から、次の論点――資本の作出する世界市場に関する諸問題という本格的論点――に移らなければならない。

（註1）前者を代表するものは宇野教授であり（宇野弘蔵『マルクス経済学原理論の研究』参照）、後者を代表するものは松井教授である（松井清『世界経済学原理』参照）。

（註2）たとえば、松井教授は外国貿易等々の歴史的・具体的性格を承認する場合に『発達』を典拠として（『ロシアにおける資本主義の発展』岩波文庫版　大岩・西訳（上）六四頁）次の如く述べている。「……次に考えてみなければならないのは、第四の項目以下〔マルクス『経済学批判』計画の――岡田〕の性格である。国家、外国貿易、世界市場の問題は資本主義の一般的法則に対してどのような関係に立つものであろうか。これまで殆ど常識となっているところでは、これらの諸範疇は歴史的・具体的なものであって、資本主義の一般的法則を考察する場合には抽象されねばならぬということである。……三つの項目中、とくに外国貿易が資本主義にとって歴史的・具体的には必然であるが、論理的には必然的なものではないということは、マルクス以後レーニンによって繰返し主張されているところである。……私の見解では、外国貿易は資本主義にのみ伴う現象ではなく、古代社会にも中世社会にも存在する。したがってそれ自身は資本主義にのみ固有な法則、資本主義の一般法則を考察する場合には抽象されなければならないのである。」（松井清「世界経済と経済学」『経済論叢』第七八巻第二号所収　六～八頁）こゝで教授は、「国家」「外国貿易」「世界市場」は資本制生産にとって固有なものでも、必然的なものでもないのだから、それ故に資本制生産の基本的諸規定の考察の場合に抽象されるのだ、と主張している。

（註3）レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』岩波文庫版　大山・西訳（上）六四～六頁。

（註4）たゞし、レーニンが〃実現の問題（いわゆる市場問題）〃は「資本主義一般の理論に関する抽象的な問題」であるとし、〃外国貿易あるいは国外市場に関する問題〃は「歴史的な問題、しかじかの時代におけるそれこれの国における資本主義の発展の具体的な諸条件の問題である」と述べていることは附記しておかねばならないだろう。レーニン『市場問題に関する理論』経済学批判会刊　参照。（この附記は全体の議論に影響しない。）

（註5）レーニンは『発達』序言で自らその主題を次のように限定している。「この労作において著者は、ロシアの資本主義のための国内市場はいかに形成されつゝあるか？　の問題を研究するという目的を立てた。周知の如く、この問題はすでにずっと以前にナロードニキ的諸見解の主要な代表者達によって提起されたところである。そこで我々の課題はこれらの見解の批判に存するであろう。」（前掲訳書（上）一二頁）ローザ・ルクセンブルグはこの論争全体の〃地方的性格〃を、「ロシアが西ヨーロッパの例にならって資本制的発展をとげるべきか否かの問題」（Rosa Luxemburg; Die Akkumulation des Kapitals, Gesammelte Werke Bd. VI, s. 204）として特徴づけている。

（註6）この論文で資本とはいうまでもなく産業資本に立脚する、歴史的に一時代を画する資本制生産様式を意味するのであって、資本のいわゆる〃大洪水以前的形態〃に属する高利貸資本、商業（前期的）資本は問題とされない。

（註7）次のようにいうとき、吉信・斎藤氏は、経済学は資本の全歴史をそのまゝ〃理論化〃すべきだと主張するのであろうか。「マルクスの経済学批判体系は、その最初の一部分としての『資本論』にみられるように、資本主義の矛盾その本質の暴露、その胎内でのプロレタリアートの成長とともにはじまり、その実践的直観の階級的理論的表現であり、そのような立場に立ってこそ、マルクスは資本主義の生成・発展・消滅の法則を解明しえたのであり、それは最も一般的な最も抽象的な最も簡単な範疇＝商品の中に、資本主義社会のあらゆる矛盾の萌芽を見出すことによって、そこから出発し内面的脈絡を矛盾の発展としてたどりながら、より具体的なより複雑な範疇へと上向し、ついに資本制社会の経済構造を『一個の豊富な総体性』『多様の統一』として把握したのである。この把握は偶然的擬乱的要素を捨象することによって、歴史的・理論的になされたのである。たとえば、『資本論』第一巻第二四章『本源的蓄積』においてマルクスが資本の『歴史』に最初から弁証法的に生長しはじめている資本の『前史』として、保護制度、租税制度、国債制度と共に国家による資本主義的生産様式

創出の『血と火』で彩られた歴史を叙述し、国家およびその財政制度の役割を暴露し、その理論的意義を明かにしたのである。」（吉信爾・斉藤博一マルクス『経済学批判体系』研究序説」『経済論叢』第七二巻第六号　所収　五七～八頁）

二、資本制生産様式の結果としての世界市場

資本制生産は商品流通を前提するとともに自らそれを措定する。

しかしながら、産業資本の市場へ供給する商品はいまや単なる商品ではなく、商品資本を表示するということは注意されねばならない。前提の措定はすでに当初の前提の単なる再現ではなくなっている。だから、資本制生産の専一的支配を前提とすれば、――労働力商品を度外視すれば――商品資本を表示する商品の流通しか存在しない。『資本論』第二巻第三篇において、マルクスは、社会総資本の再生産と流通として、ほかならぬ W'……W' という産業資本の循環の局面を考察しているが、そこに与えられている叙述こそ、資本制的に措定された商品流通の社会的に総括された叙述をなしているのである。

ところが、彼は『資本論』の一つの主要な部分においてかゝる叙述を行いながら、同じ著作の中で同時に、産業資本の流通過程を〃特色ずける〃ものとして、「商品の由来の全面的性格」を持つところの「世界市場としての市場の定在」を、次の如く指摘するのである。

「産業資本が貨幣または商品として機能する流通過程の内部では、貨幣資本としてであれ、商品資本としてであれ産業資本の循環は、きわめて相異なる社会的生産様式――これが同時に商品生産たる限りでは――の商品流通と交錯する。商品が奴隷制に基く生産物があるか、農民（中国人・インドのライオット）または共同体（蘭領東インド）または国営生産（往時のロシア史にあらわれる農奴制に基くそれの如き）または半未開の狩猟民族などの生産

物であるかを問わず、それらは商品および貨幣として、産業資本が以て自らを表示する貨幣および商品に対応して、産業資本の循環にも入りこめば、商品資本によって担われる剰余価値――これが収入として支出される限り――の循環にも入りこむ。つまり商品流通の両流通部門に入りこむ。それらが出てくる生産過程の性格はどうでもよい。商品としてはそれらは市場で機能し、商品としてそれらは産業資本の循環ならびにそれによって担われる剰余価値の流通に入りこむ。かくして産業資本の流通過程を特色ずけるものは、商品の由来の全面的性格であり、世界市場としての市場の定在である。」(Das Kapital Bd. II, S. 105)

たしかに、商品が商品資本を表示するとしても、商品は市場では単なる商品として機能するにすぎず、貨幣が貨幣資本を表示するとしても単なる貨幣として商品に対応するにすぎない。市場ではだから、資本制的に生産された商品も、非資本制的に生産された商品も商品としては同一の資格において登場する、ということは当然のことである。しかしながら、何故に、商品の由来の全面的性格を持つところの世界市場の定在が産業資本の流通過程を特色ずけるものであるのか。商品の由来の全面的性格ではなしに、その由来の全資本制的性格こそ産業資本の生活する市場を〝特色ずける〟ものではないのか。

だが、右のマルクスの指摘は、資本制生産様式に関する単に歴史事実上の指摘であるかもしれない。というのは、すでにみた如く、世界市場は資本の歴史的前提としてすでに形成せられていたのであって、産業資本が商品の供給をそこにあおぎ、商品をそこへ供給するのはこのすでに与えられた世界市場であるからである。そうであるとすれば、産業資本の流通と非資本制的な商品の流通の「交錯」は事実として諒解することができる。その場合には歴史的前提をなしていた世界市場の一構成部分として、産業資本の作り出す市場が組みこまれたのであって、そこから直ちに生

ずる「交錯」は、たゞ単なる歴史上の事実にすぎない、ということになる。

前節において論じたように、資本はその発生のためには歴史的諸前提・諸条件の定在が必要である。ところがこれらの諸前提・諸条件の定在およびその成熟は、事実上、諸国家において同等ではなかったのであって、資本制生産が発生し、確立したのははじめはやっと若干の諸国家において——大工業まで発展したのはイギリスのみ——であったにすぎない。この場合、確立した資本制生産の周囲は非資本制的環境にとりかこまれているのであって、これははじめに資本制生産の確立した国家の内部においてさえそうである。かゝる状況の下では、産業資本の流通と非資本制的商品の流通との「交錯」は事実上当然であって、かゝる世界市場の定在は、したがって、さしあたりまったく歴史事実的現象として現われるのである。

こゝで議論に立入るに先立って、市場——世界市場の概念を抽象的に規定しておきたい。

市場とは、抽象的に考察すれば、そこにおいて商品の販売者群と購買者群がそれぞれ集合して対立競争し、この対立するそれぞれの側である販売者間、購買者間において同時に競争の行われる場として規定することができる。そしてこの場に登場する需要と供給は、結局のところ、その背後に立つ生産および消費によって規定されている。(1)

しかしながら、市場のこの規定の下において、世界市場という単一の全世界的市場の定在を想定するということは、一見常識と矛盾するものである。すなわち、一見して明かな如く、市場はそこで取引される商品種類の相異に従ってそれぞれ別個な市場として成立つのであり、その立つ場所の相異に従って各地点の市場が存在するのであり、また取引商品の集散範囲に従ってあらゆる意味での地方市場がそれぞれに成立つのである。だから市場は、さしあたり、その無限の細別において現われるのである。本来の商品市場と区別される貨幣（資本）市場、労働〔力〕市場の

大区別を別としても、それはたとえば鉄鋼市場、棉花市場等々であり、[2] また諸地方市場、たとえば各国的な、各地方的な、あるいはまた各都府県的な市場である。こうした市場の無限の分化をみるならば、《単一の世界市場》などというものは単なる空想の如くに思えるし、「世界市場」という想定は現実にはまったく存在しないものから行った、無理な想定であるかの如くに思える。

だが、こゝで種々の商品種類による市場の区別を捨象すれば、あるいは、あらゆる使用価値を持つ商品がその市場で取引されるものと想定すれば、市場の諸々の地方的区別が残ることになるであろう。たとえば、一国をとってみれば、それぞれの地方の諸市場が区別され、世界全体をとってみればヨーロッパ市場、アジア市場、ラテン・アメリカ市場等々の区別が、あるいはまたイギリス市場、合衆国市場、フランス市場等々の区別が存在することになるであろう。[3]

すでにみたように、商品の無国籍性は貨幣の世界貨幣への発展とともに、市場に当初から世界市場の性格を持たしめるのであるが、資本制生産様式の確立と発展は、生産物の商品形態を一般化し普及するとともに、あらゆる意味における地方市場の相互接触・関連・融合を作り出し、それらをますます合一せしめる傾向を持つ。資本制生産の発展にともなう工業製品の大量生産、原料および食料等々の大量の需給、市場のこの発展に結びついた運輸・通信機関の発展、世界商業の発展等々は市場の全世界的規模における単一化を決定的たらしめる。シスモンヂは「人類はいわば単一の市場を形成しているにすぎない」と述べたが、適切な表現というべきであろう。[4]

たしかに、あらゆる意味における諸地方市場、あるいは諸国家のそれぞれの国内市場の総計——aggregation——を離れては世界市場は実存しえないが、資本はそれらの諸市場を決定的に世界市場という単一の市場の単なる地方市

場に転化するのであって、諸地方市場はそれらを構成部分として成立つ、自立的な世界市場という全体の単なる部分として、《単一の世界市場》の運動に規制されざるをえないことになる。

ところで、かゝる世界的に単一な市場——世界市場は、さしあたり、資本制生産の単なる歴史事実上の事態にすぎないものとして現われる。マルクスも、『資本論』の他の箇所において〝純事実的関係〟として世界市場に触れて次の如く述べている。

「工場制度がある程度まで普及して一定の成熟度に達するや否や、殊に、工場制度自身の技術的基礎たる機械そのものがふたゝび機械によって生産されるや否や、石炭や鉄の生産ならびに金属加工および運輸業が革命され、総じて大工業に照応する生産諸条件が成立するや否や、この経営様式は、原料と販売市場との点でのみ制限される弾力性、すなわち突然の飛躍的な拡張能力をうるのである。機械は一面では、たとえば繰棉機が棉花生産を増加させたように、原料の直接的増加を生ぜしめる。他面、機械生産物の低廉と運輸＝および交通業の変革とは、外国市場を征服するための武器である。外国市場の手工業的生産物を破滅させることにより、機械経営は外国市場を強制的に自己の原料の生産場面に転化させる。かくして東インドは大ブリテンのために棉花、大麻、黄麻、藍などを生産することを余儀なくされた。大工業国における労働者の絶えざる『過剰化』は、促成的な移住および外国の拓殖を助長するのであって、それらの外国は、たとえばオーストラリアが羊毛生産地に転化されたように、母国の原料の生産地に転化されるのである。機械経営の主要所在地に照応する新な国際分業が生み出されて、地球の一部は、主として工業的な生産部面としての他の一部のための、主として農業的な生産場面に転化される。」(Das Kapital Bd. I, S. 474～5)

さて、これはたしかに〃純事実的関係〃の指摘であるが、こゝに指摘されている世界市場の姿は、すでに、単に前節で論じた歴史的前提たる世界市場の姿でもなければ、資本制的商品の流通と非資本制的商品の流通との〃単なる交錯〃――産業資本の作り出す市場がその控え目な単なる一部分をなすが如き――を表現する世界市場のそれでもない。世界市場は、この姿においては、事実上、資本制蓄積の主要な一条件に転化しているのであって、それはすでに資本によって作り変えられている。非資本制的に生産せられた商品は、なおかつ世界市場に投入せられ、その規模は絶対的に絶えず増大するとはいえ、非資本制的に規定されている生産と消費の条件の下で世界市場に登場する需要および供給は、いまや資本制生産の発展に照応せしめられ、その蓄積を促進する一条件として、それに従属的に規定されているのである。

歴史的に与えられたものである世界市場の、資本に照応せるものとしての措定、資本による世界市場のこの作出は、もちもん、事実においては無条件に承認されよう。資本は世界市場を自己に照応するものに変形し、同時にそれを拡大する。そして世界市場の資本によるこの作出によって、資本は、旧来の諸生産様式を包摂し、解体させ、自らに従属せしめ、資本によって代置せしめる。資本の作出する世界市場が発展し、遂には全地球をおゝうに至ったという事実は、歴史上の事実として何びとも否定することができないであろう。

しかしながらマルクスは、世界市場の作出を事実の上で強調するばかりでなく、資本制生産様式に固有なものとして、そしてそれに必然なるものとして、主張するのである。たとえば、彼は『資本論』において次の如くいう。

「世界市場はそれ自身この生産様式の基礎を形成する。他方では、絶えず拡大する規模で生産しようとする同じ内在的必然性が世界市場の不断の拡大にかり立て、かくしてこゝでは商業が工業をではなく、工業が商業を不断に

変革する。」(Das Kapital Bd. III, S. 365)

「資本制生産の三つの主要事態。

(一) 少数者の手における生産手段の集積。かようにして生産手段は、直接的労働者の所有としては現象しなくなり、その反対に生産の社会的力能に転化する、——最初には資本家の私的所有として現象するとはいえ。……

(二) 社会的労働としての、労働そのものの組織、——協業、分業、および労働の自然科学との結合、によって。

どちらの側からみても資本制生産様式は、私的所有と私的労働とを——対立的形態においてだとはいえ——止揚する。

—

(三) 世界市場の作出 (Herstellung des Weltmarkts)。

資本制生産の内部で発展する・人口に比しての尨大な生産力は、また同じ比率でではないが人口よりもはるかに急速に増大する資本価値(その物質的基体ばかりでなく)の増大は、増大する富に比しますます狭隘化する基礎——右の尨大な生産力の作用するための基礎と矛盾し、また、右の膨張する資本の増殖諸関係と矛盾する。だから恐慌が生ずる。」(Das Kapital Bd. III, S. 295〜6)

こゝにみるように、マルクスは資本による世界市場の作出——Herstellung des Weltmarkts——を、事実において重要なものとして承認するばかりでなく、それを資本に必然なるものとして、資本に固有なるものとして主張するのである。

しかし、彼のこの主張にもかゝわらず、世界市場の作出は、まったく〝純事実的関係〟であって、資本の本性にと

っては偶然的な事態ではなかったのであろうか。もしそれが、資本にとっては偶然的な事態であったとすれば、資本の本性にとっては、資本制生産のまず確立した一国、乃至少数の諸国で資本関係が発展を遂げればそれで充分であって、それ以外の多数の諸国家が依然として旧来の諸生産様式の支配の下にとゞまるかどうかは関心のない、関連のないことである、ということになるであろう。そうした場合には、資本制生産の確立し、発展した諸国家と、旧生産様式の下にとゞまる多数の諸国家との長期にわたる静止的な共存こそ、資本に照応する世界像であったであろう。その場合には、作出された世界市場という事実は資本にとってはどうでもよかった事柄であったのであって、もちろん、経済学が世界市場をその本来の対象として正面から取扱う必要もない、ということになるであろう。だが、世界市場の作出が、資本の本性にとって偶然なるものでないとすれば、その必然性はいかに説明されるべきであるのか。

世界市場の作出の必然性を論証しようとする意図は、ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』において見出される。この問題を解くにあたって、彼女は、周知の如く、それを資本制社会における剰余価値の実現の不可能性から説明するのであるが、それに適用されるのは独特の〃再生産表式〃であって、この適用されるべき〃再生産表式〃を、彼女は『資本論』第二巻第三篇中の拡大再生産（第二例）の表式[5]——以下これを「マルクス表式」と略記する——を修正することによって作り上げるのである。

ローザによるこの修正を明かにするためにいま、「マルクス表式」を掲げるならば——

第一年度

I　5000 c＋1000 v＋1000 m＝7000

II　1430 c＋ 285 v＋ 285 m＝2000

第二年度

I　5417 c＋1083 v＋1083 m（＝7583）

II　1583 c＋ 316 v＋ 316 m（＝2215）

第三年度

I　5869 c＋1173 v＋1173 m（＝8215）

II　1715 c＋ 342 v＋ 342 m（＝2399）

第四年度

I　6358 c＋1271 v＋1271 m（＝8900）

II　1858 c＋ 371 v＋ 371 m（＝2600）

この「マルクス表式」に対してローザは次の如き批判を行う。「表式は、資本制的発展の事実上の経過と矛盾するところの、総資本の運動を前提とする。資本制生産様式の歴史は、一見、二つの事実によって特徴ずけられる、――一方では全生産領域の週期的な飛躍的膨脹、他方では種々の生産部門のきわめて不同な発達がこれである。イギリスの木棉工業の歴史、すなわち一八世紀の最後の四半世紀から、一九世紀の七〇年代に至る、資本制生産様式の歴史における最も特徴的な一章は、マルクスの表式の見地からしては、まったく説明できないように思われる。[6]」そして、彼女は有機的構成比の不変という「マルクス表式」の想定を「技術の進展は、マルクス自身にしたがえば、可変資本に比較しての不変資本の相対的増大となって現われねばならぬ。このことからして、資本化される剰余価値のcとvとへの分割における絶えざる変化の必然性が生ずる[7]」と述べて、有機的構成の高度化という想定にきりかえ、第一部

門の蓄積に主導された、それに照応する第二部門の蓄積というマルクスの想定を、「マルクスが通例やらせているように第二部門の資本家達をして強制的にこの過剰〔すなわち次にみるところの「ローザ表式」から結論される、IIm中の過剰部分――岡田〕を自ら消費させるか――このことは資本家達に対し、蓄積の法則をふたゝび単純再生産の方向に曲げるであろう」[8]として、その想定を、自己の表式における、第二部門の蓄積の第一部門の蓄積から独立した遂行という想定にきりかえるのである。しかも基礎的には「マルクス表式」の数字を採用し、そして剰余価値率の不変という「マルクス表式」の想定を、その上昇の想定にきりかえて、かくしてローザは、彼女自身のいかなる〝表式〟に到達するか。

「ローザ表式」は次の如くである[9]――

第一年度

I　5000 c＋1000 v＋1000 m＝7000

II　1430 c＋ 285 v＋ 285 m＝2000

第二年度

I　5428 $^{4}/_{7}$ c＋1071 $^{3}/_{7}$ v＋1083 m＝7583

II　1587 $^{5}/_{7}$ c＋ 311 $^{2}/_{7}$ v＋ 316 m＝2215

第三年度

I　5903 c＋1139 v＋1173 m＝8215

II　1726 c＋ 331 v＋ 342 m＝2399

第四年度

I　6424 c＋1205 v＋1271 m＝8900

II　1879 c＋ 350 v＋ 371 m＝2600

こゝにみるように「ローザ表式」は、蓄積される剰余価値分の不変資本と可変資本の分割比の高度化、剰余価値率の増大において変更されており、しかもこの変更にもかゝわらず、生産される剰余価値量と、剰余価値の個人的消費分と蓄積分への分割比は、「マルクス表式」のまゝ両部門において維持されている。

ところで、拡大再生産の場合の均衡条件は、第一部門中の可変資本部分に剰余価値中個人的消費部分を加えたものに、剰余価値中蓄積部分のうち可変資本として投下される部分を加えたものが、第二部門中の不変資本部分に剰余価値中蓄積部分のうち不変資本に投下される部分を加えたものが、相互塡補において均衡するということであった。単純再生産の場合には、I (v＋m)＝IIc として現象した均衡条件が、拡大再生産の場合には、I〔{v＋m(k)}＋m(a)v〕＝II (c＋m(a)c〕(I (v＋m)＞IIc) として現象する。この均衡は、第二部門の蓄積が第一部門の蓄積に主導されてそれに照応して行われる、ということによって維持される。

したがってもし、蓄積におけるこの均衡が無視され、第二部門の蓄積が第一部門の蓄積から独立して、それと関連なしに遂行されるとするならば、当然のことながら均衡は成立たない。ところがローザは、「マルクス表式」を一方では蓄積分の有機的構成比を変動せしめることによって、すでに与えられた均衡条件を変更せしめながら、しかもこの変更からは独立して、「マルクス表式」における両部門の蓄積率――剰余価値の消費分と蓄積分への分割比――はこれを固定的に維持するのであるから、自らの表式において均衡が成立しないことは当然の成りゆきである。彼女は

はじめから、均衡が成立たないように諸条件を設定したのである。

だから、彼女が自己の表式から、「蓄積がかゝる仕方で進行するものとすれば、第二年度には16だけ、第三年度には45だけ、第四年度には88だけ生産手段の不足が生じ、そして同時に、第二年度には16だけ、第三年度には45だけ、第四年度には88だけ消費資料の過剰が生ずるであろう。」[10]として、剰余価値の実現の不可能を説いたとしても、かゝる不均衡ははじめから同義反復にすぎない。拡大再生産の均衡諸条件の破壊の下ではその均衡は成立たない。それとともに、そもそも拡大再生産の均衡諸条件を明かにすべき〝表式〟も表式としての意味を失ってしまう。

「マルクス表式」はもちろん、蓄積過程の全矛盾を表現しうるものでもなければ、蓄積と市場限界との衝突を十全に表現しうるものでもない。まして、ローザのいう如く、それが「一八世紀最後の四半世紀から一九世紀の七〇年代に至る、資本制生産様式の歴史における最も特徴的な一章」の「事実上の経過」を表現していない、と批判してみたところでもともとそれは無理な要求なのである。均衡は、現実には、資本制生産という無政府的生産の下では、不断の不均衡の均衡化としてのみ、傾向としてのみ存在するにすぎない。だから、「マルクス表式」が単なる抽象にすぎないというならば誤りであって、それはこの現実の均衡化傾向を表現するものであるが、とはいえ、それによって蓄積過程の全矛盾を表現せしめようとしてもそれは不可能なことであり、表式から表式そのものの持つ意味さえ失わせてしまうのである。

「マルクス表式」は本来、v＋mのドグマを批判するところの社会総資本の再生産と流通の理論の一部をなす、拡大再生産の場合の均衡諸条件を明かにするという目的のもとに作られたのであって、この問題の解決を表現するものとしては、成功した表式であるといわなければならない。

いうまでもなく、マルクス表式は恐慌に対して特定の意義を持つ。だが、再生産の正常的経過の諸条件が「またそれと同数の、異常な経過の諸条件すなわち恐慌の可能性に転変する」(Das Kapital Bd. II, S. 500~1) としても、不均衡はつねに均衡から説明されるべきものである。したがって、ローザによる「マルクス表式」修正は、彼女によるマルクスの拡大再生産の均衡諸条件の解明に対する、明かな誤解といわなければならない。

ローザのマルクス解釈に関するこの誤謬は我国においてもつとに指摘されてきたところである。[11] しかしながら、彼女がそもそも何を論証しようとして、敢てマルクスを修正したのか、ということを考えるならば、『資本論』第二巻第三篇に対する彼女の誤解を批判するにとゞまることはできない。さきに触れたように、彼女の解決すべき問題は世界市場の問題であったのであり、とくにその作出の必然性に関する問題であったのである。彼女のそもそも論証すべきであった問題を問題として明確に提起し、解決しえなかった問題を解決し、そこにおける彼女の誤謬を批判しなければ、彼女に対する批判も充分なものではない。しかも、その問題は経済学にとってまったく重要なものであるのだから、なおさらそうである。

彼女の解くべき問題が世界市場の問題であったということが唐突に思えるならば、『資本蓄積論』における次の叙述を参考にするのがよいであろう。

「必要なすべての生産手段および消費資料は何故に専ら資本制的に生産されねばならぬか、ということはまったくわけがわからない。なるほどまさにこの仮定はマルクスの蓄積表式の根底に横わっているが、しかしそれは日常的実践および資本の歴史とも、またこの生産様式の特徴とも一致しない。一九世紀の前半期においては、イギリスにおける剰余価値は、大部分は、棉製品の姿で生産過程から出てきた。しかしその資本化の物的諸要素そのものは

アメリカ連邦の奴隷諸州からの棉花として、あるいは農奴制ロシアの広野からの穀物（イギリスの労働者のための生活資料）として、なるほど確かに剰余生産物ではあったが、しかし決して資本制的剰余価値ではなかった。資本制的蓄積が、いかにかゝる非資本制的に生産された生産手段に依存しているかは、アメリカの南北戦争による耕作中止の結果たる、イギリスの棉花恐慌、あるいはクリミヤ戦争における農奴制ロシアからの亜麻輸入杜絶の結果たる、ヨーロッパの麻織物業における恐慌をみればわかる。[12]」

「資本制生産は、自己の（労働者および資本家の）需要以上に、非資本制的な諸層および諸国を購買者とする消費資料を供給する。たとえば、イギリスの木棉工業は一九世紀の最初の三分の二期間に、ヨーロッパ大陸の農民および都市の小ブルジョアに、さらにインド、アメリカ、アフリカ等の農民に、棉製品を供給した（そして部分的には今も供給している）。この場合には、イギリスにおける木棉工業の非常な拡張の基礎をなせる、非資本制的な諸層および諸国の消費があったのだ。だがこの木棉工業のためには、イギリスそのものにおいて、紡錘や織機を供給せる広大な機械製造業が発達し、さらにこれと関連して、金属工業および石炭業が発達した。この場合には第二（消費資料）部門は、ますます多量に、その生産物を外資本制的社会層で実現したのであって、その際それ自身は、自己の蓄積により、第一（生産手段）部門の国内的生産物に対するますます大きな需要を生じ、したがってまた、この部門をして、剰余価値を実現し、かつますます多く蓄積することを得せしめたのである。

反対の場合をとってみよう。資本制生産は、生産手段を自己の需要以上に供給して、購買者を非資本制的諸国に見出す。たとえばイギリスの工業は一九世紀の前半期にアメリカやオーストラリアの諸州における鉄道敷設のための建設材料を供給した。鉄道の敷設は、それだけではまだまだ、一国における資本制生産様式の支配を意味しはし

ない。事実上、鉄道そのものはこれらの場合には、たゞ資本制生産の入来のための第一前提の一つにすぎなかった。あるいはドイツの化学工業は、アジア・アフリカ等における資本制生産の行われない国々で大量的に販売されるところの、染料の如き生産手段を供給している。この場合には、資本制生産の第一部門はその生産物を外資本制的領域で実現する。このことから生ずる第一部門の前進的発展は、資本制生産国では第一部門の通増的労働者軍のために消費資料を供給するところの第二部門の対応的な拡張を惹起する。

これらの場合はいずれもマルクスの表式と相異している。第一の場合においては、第二部門の生産物は、両部門の要求――両部門の可変資本と剰余価値の消費部分とによって測定された――を超過する、第二の場合においては、第一部門の生産物は、両部門の不変資本の大いさを――生産を拡張するためのその増大を斟酌しても――超過する。いずれの場合においても、剰余価値は、両部門のどれかの内部でその資本化を可能ならしめ、かつ制約するであろうような現物形態では現われない。――実察において、この二つの典型的な場合は、つねに交叉しあい、互に補いあい、互に代りあうのである。[13]」

こゝにみるように、ローザが「マルクス表式」は資本制蓄積の事実上の経過と一致しない、という場合、資本制的商品の流通と非資本制的商品の流通との「交錯」の事実を承認し、資本制生産がその《外的環境》である非資本制的環境を、その蓄積の一般的条件に転化したということを念頭においているのであって、彼女はこの事実を説明しようとして、資本制生産の専一的支配下における剰余価値の実現の不可能を持ち出し、マルクス再生産論――『資本論』第二巻第三篇の――を適用しようとし、適用に際してそれを修正したのである。

彼女の問題が、もともとv＋mドグマの批判および拡大再生産の均衡諸条件の問題にあったのではなく、世界市場

に存在したということは、『資本蓄積論』の本来の意図、およびその意図を生ぜしめるべき、一九世紀末から二〇世紀初頭における世界市場の新な動向と、それから発生した国際労働運動内部の論争点からも確証される。

すなわち、ローザ・ルクセンブルグの目的は『資本蓄積論』において、その副題——帝国主義の経済〔学〕的説明への貢献 (Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus) ——の示す如く、接近する帝国主義戦争に直面して、帝国主義という世界市場の新しい動向を経済学的に明かにすることであった。[14] かくして、『資本蓄積論』にはその著者なりの帝国主義の規定が以下の如く結論的に与えられているのである——

「非資本制的領域の獲得をめぐる、資本制諸国の高度な発展と、ますます激しい競争とに際して、帝国主義は非資本制的世界に対するその攻撃的行動においても、資本制的諸国間の対立の激化においても、その精力と暴虐性とを増す。だが帝国主義がより暴虐により精力的に、より根本的に、非資本制的文化の没落をはかればはかるほど、それはますます急速に、資本蓄積のよって立つ土台を奪うことになる。[15]」

「資本主義は宣伝力 (propagandistische Kraft) を持った最初の経済形態、すなわち、世界に拡がって他のすべての経済形態を駆逐する傾向を持った、他の経済形態の並存を許さない一形態である。だが同時にそれは、独立しては、すなわちその環境およびその培養土としての他の経済形態なしには存在しえないところの形態である。[16]」

ローザは、帝国主義を非資本制的領域の獲得をめぐっての資本制的諸国家間の激烈な敵対とみなし、この必然である所以を、世界市場における資本制的商品の流通と非資本制的商品の流通との「交錯」の事実から自ら結論した、資本制蓄積の自立的遂行の不可能性に求め、〃資本制生産様式は、一方ではそれ自身で自立しえず非資本制的領域に依存せざるを得ないにもかゝわらず、他方では自らの存立の基盤である非資本制的領域をくずし、のみつくす、という

矛盾した生産様式である〃と考えるのである。したがって、彼女によれば、非資本制的領域の併呑とその分割をめぐっての列強の闘争によって特徴ずけられる帝国主義こそ、かゝる資本主義の最後の段階をなす、ということになる――

「資本が軍国主義によってますます暴力的に、外国ならびに本国で非資本制的な層を排除し、また、すべての勤労者層の生活条件を低下させればさせるほど、世界的舞台における資本蓄積上の日々の出来事は、ますます政治的および社会的な破局と痙れんとの一つの連鎖に転化するのであるが、それらは恐慌の姿をとった週期的な経済的破局と一諸になって、蓄積の継続を不可能ならしめ、資本支配に対する国際的労働者階級の反乱を――資本支配がその自然的な自ら作り出した制限に衝突する以前にさえも、必然ならしめるであろう。」[17]

こゝにみるように『資本蓄積論』は、レーニンの『発達』が、すでに西ヨーロッパでは確立している資本主義がロシアにおいても可能であるかどうか、という〃地方的な問題〃を主題としていたのに反して、はじめから帝国主義という全世界的な問題を問題としていたのであり、それを世界市場の必然的動向として問題としていたのである。

この問題を解くにあたって、ローザ・ルクセンブルグが社会総資本の再生産と流通の理論を適用した――しかも「マルクス表式」の修正によって――ということは、世界市場の必然性を説く上で適用されるべきでないものを適用した、ということを意味するが、それはローザ自身が、マルクスを誤解していたばかりでなく、解くべき問題を世界市場の問題として明確に意識していなかった、ということを示すものである。

しかも、問題提起のこの不明確さばかりでなく、ローザには、資本制生産様式はそれ自身自立したものとしては成立たない、という前提があって、資本制蓄積の自立的遂行の不可能性から世界市場を説明しようとするところに、そ

の世界市場の必然性の説明に致命的な欠陥があるのである。

資本制生産様式がもし自立的な生産様式として成立たない、とするならば、それは歴史的に特殊な生産様式として歴史上の一時代を画することができないし、たかだか地方的な、あるいはまったく経過的に出現した生産様式――それはすでに一生産様式たりえない――であるにとどまることになるであろう。それは前資本制的生産様式を排除して自らをもって代置し、社会を〝ブルジョア社会――資本制社会〟として措定することもできない。まして自己を宣伝し普及し、全世界にむかって発展し、いたるところに自己を確立することなどは到底不可能なことである。そしてまた、総じて、資本制生産様式の専一的支配を前提として、その内的諸関連を究明してきた経済学などはおよそ無意味だ、ということになるであろう。資本制生産様式が歴史的に特殊な一生産様式として自立的な生産様式であるということは、事実であるばかりでなく、『資本論』においてマルクスがそれをよく科学的に論証したところである。我々はつねに資本の自立性から出発しなければならないのであって、その非自立性から出発することはできない。

だが、資本の自立性を前提とするならば、我々は問題のはじめに立帰ってしまうのではないか、と疑問が生じよう。自立的生産様式の支配する資本制社会は、何故に、国家の枠をこえて他の非資本制的諸国家・領域へむかって〝発展〟しなければならないのであるか。その、はじめに確立した一国乃至若干の諸国家において、資本制生産は発展していけばそれで充分であって、もしその他の多数の諸国家が、依然として長期にわたって旧来の生産様式の下にとどまっていたとしても、それは当然なことではないのか。そもそも世界市場の作出は資本の必然としては説明しえないのであって、単に歴史事実上の現象にすぎないのではないのか。問題のこの困難性を、いまやローザ・ルクセンブルグのように、資本の非自立性を結論することによってきりぬけることはできない。資本の自立性は全体にわたっ

て前提されなければならない。

マルクスに立帰ろう。マルクスにあっては「世界市場」は〝ブルジョア社会のブルジョア社会としての自立性〟が前提されて、しかる後に世界市場が説明されるべきものとして提起されていた。たとえば、計画を提示する次の箇所はこの関連を示している——

「——最後に世界市場。国家をこえてのブルジョア社会の拡大・包摂〔あるいは発展——岡田〕。諸恐慌。交換価値に立脚する生産様式および社会形態の解体。社会的労働としての個人的労働の現実的措定およびその逆。」(Grundrisse, S. 175)

こゝでは、ブルジョア社会のブルジョア社会としての成立は、「世界市場」に先立って前提されているのであって、この自立的社会であるブルジョア社会が「国家をこえて発展」するものとして世界市場が考えられているのである。それでは、ブルジョア社会は自立的社会として、いかにして「国家をこえて発展」するか。

「資本制的生産過程は、本質的には同時に蓄積過程である。」(Das Kapital Bd. III, S. 245) から、いま、資本制生産の専一的支配を前提として、蓄積と市場の関連を考えてみよう。

資本制生産の下では、無制限の市場はつねに考えることはできない。市場は資本制生産そのものによって制限された、それ自身限界ずけられた市場である。だが、この限界は決して固定したものではないのであって、資本制蓄積が自らその市場を拡大していくことは「マルクス表式」においても明かである。ところでマルクス表式にあっては——拡大再生産（第二例）に限らず——蓄積はつねに市場の限界に照応して遂行されるものであることが前提されている。表式においては生産と消費の均衡・照応は前提されている。だが、この想定は資本制生産の一傾向を明かにする

ためには必要な想定ではあれ、もちろん、蓄積と市場の現実の関連をそのまゝ表現するものではない。この想定はそこで解かるべき問題の性格上設定されたものではあるが、蓄積がたゞ与えられた市場限界の内部でのみ、つねにそれに照応して遂行されるものと考えるならば、資本制蓄積の特徴を完全に見失うことになるだろう。

資本制蓄積の特徴は、むしろ蓄積のための蓄積、資本制生産のあらゆる限界を克服せんとして遂行される蓄積に存する。資本制蓄積のこの特徴をマルクスは次のようにいっている。

「矛盾はまったく一般的に表現すれば次の点、すなわち資本制生産様式は、価値およびそれに含まれる剰余価値を度外視し、その内部で資本制生産が行われる社会的諸関係をも度外視して、生産諸力を絶対的に発展させる傾向を含むが、他面ではそれは、実存する資本価値の維持および最高度の増殖（すなわちこの価値の絶えず加速される増大）を目的とする、という点にある。」(Das Kapital Bd. III, S. 277)

自らの持つ内的諸限界を克服せんとし、それらを諸制限として突破するのは、矛盾せるものとしての資本制生産様式の根本的特徴である。[18]『資本論辞典』は〝資本主義の制限と限界〟について一項目を設け、「あるものは限界によってあるもの自身なのであり、限界のなかに自分の質を持っている、限界はあるものの内在的規定なのである。ところがあるものの限界がその物の否定者であり、同時にその本質的なものであるということになると、限界は制限になる。マルクスは、資本主義的生産様式はそれ自身の限界（この限界は資本の本性と一致する）を持っているが、生産力を無限に高めようとする結果、その限界をのり越えようとする傾向を有している。このとき資本主義の限界は制限に転化する、と考えた。……」[19]と説明しているが、資本制生産がそれ自身の内的諸限界を持つ、ということは決して、資本がたゞその諸限界の内部でのみ運動する、ということを意味するものではない。そうではなくて資本は、か

えって、これらの諸限界を克服せんとし、それらを諸制限に転化し、諸制限を突破するのである。与えられた市場限界の克服もまた、資本制蓄積衝動の充足のための不可避の結果である。

資本制生産は労働者階級の個人的消費をその生活の最低限に制限し、資本家階級の個人的消費をも蓄積衝動によって制限する。この敵対的な、狭隘な消費の基礎上に自己の市場を作り出すのであって、蓄積はそれとして市場を拡大するとはいえ、その拡大された市場もつねに制限されており、その制限は資本制蓄積の不断に措定するところである。

ところでこゝに、マニュファクチュアが成立し、大工業が確立するや、資本制生産は飛躍的な生産拡張能力を持つに至るのであって、この生産能力の完全な発揮によって蓄積を促進しようとする資本の衝動にとっては、自らの作り出す市場諸限界は不断に突破さるべき諸制限として、ますます強く現象してくるのである。

だから、もし、資本制生産がその外部に、自らの蓄積衝動を充足せしめんとする環境、《外的環境》——非資本制的環境——を見出すならば、資本はかゝる《外的環境》をも自らの蓄積のための条件に転化し、容赦なく商品流通にまきこむであろう。この場合、資本が非資本制的な《外的環境》を自らのための市場に転化するのは、資本がそれ自身市場を作り出すことができないからではまったくない。資本制生産の、自らの内的諸制限を突破せんとする全運動が、また非資本制的環境、《外的環境》をも、自らのための市場に転化するのである。

この関連をさらに立入って考察するためには、「ブルジョア社会の国家の形態での総括」を考えなければならない。資本制生産の専一的支配下にある一社会をとってみれば、この社会もまた国家によって総括されている。資本制社会は階級社会として自らを総括する国家を維持する。資本制社会は、実は、この総括——国家という形態での総括—

ーによって資本制社会なのであり、資本制社会として完成するのである。この総括によってはじめて、三大階級は三大階級として措定されるのであり、社会成員は同時に国民として、他社会成員との国際的関連を持つのである。かくして、ブルジョア社会は、一歩進んで把握すれば、国家によって限界ずけられた社会である。

だが、国家という資本制社会のこの限界は、資本制生産に内在する諸制限とは本質上相異なるものである。資本に内在する諸制限は資本に時殊な制限であるが、国家そのものは決して資本に特殊な範疇ではない。資本制生産は国家を自らに照応するものに変形するとはいえ、この国家の定在そのものは、一般に資本が与えられたものとしてみい出す「歴史的前提」である。国家という制限は、資本にとっては与えられた制限にすぎない。「資本制生産は、国家をすでに与えられたものとして見出すのであり、はじめてそれを作り出すのではない。特定の領域内に限定された階級社会の総括者としての国家の存在は、資本があらかじめ与えられたものとして見出す〝歴史的前提〟である。国家は特殊に資本制的な範疇ではない。資本はこのようにすでに前提されたものとして存在するところの国家を、自らに照応する国家に作り変える。」(20)

こゝで、資本制生産の専一的支配下にある国家を一国家のみとすれば――あるいは、そうした諸国家を一国家とみなしてもよい――、そして、その他の諸国家においては非資本制的生産諸関係のみが存在するとすれば、地球上には資本制的な一国家と非資本制的な多数の国家が並存することになるだろう。そして非資本制的諸国家は資本制的国家の外部に存在する、その《外的環境》をなすことになるであろう。かくて、歴史的前提として与えられた世界市場における、資本制的商品の流通と非資本制的商品の流通の「交錯」は存在するとはいえ、資本制生産そのものは社会を総括している資本制的国家によって限界ずけられているのであり、非資本制的生産諸関係および非資本制的国家は資

本制生産の単なる《外的環境》をなすにすぎない。

内的諸限界を克服せんとし、それらを諸制限に転化して突破する、資本制生産の全運動とともに、かゝる《外的環境》は資本制蓄積の条件に転化され、与えられたものとしての国家的制限が突破される。

マルクスは『資本論』第三巻第三篇において、蓄積を促進する要因として――利潤率低落を阻止する要因として、その作用の二重性を強調しつゝ――対外取引（対外商業）を挙げているが、外国からの低廉な原料や食料の輸入はもちろん利潤率の低落を阻止し、蓄積を促進する。[21] だが、製品を輸出することにより、外国でより高価に販売できるならば、輸出もまたそうである。さらには、たゞ必要な原料等々が購売されえ、製品が販売されうる領域が拡大するだけだとしてさえ、蓄積は促進される。資本制生産は、かくして、非資本制的な《外的環境》を、自らの蓄積衝動を充足せしめるべき市場に転化する。

さて、非資本制的な《外的環境》の方をとってみれば――一般的に考察すれば――、そこでは多少とも共同体的な諸関係を基礎として、生産者は生産手段と未分離に存在しており、主として自給自足経済が営まれ、剰余労働も価値の性格を持つことなく、おゝむね支配者の個人的消費のために費されていたのであり、商品流通は生産と消費のこの始源的な統一の表面において部分的に存在していたにすぎない。

だがこゝに、資本制生産が歴史的に与えられたものとしての世界市場を、資本制蓄積の条件に転化し、自らに照応した世界市場に作り変え、非資本制的な環境を、自らに照応し従属した、その単なる市場に転化するならば、商品流通が一層深くこれらの非資本制的諸関係をとらえることによって、非資本制的な生産者、生産代理者の生産および消費は、ますます世界市場における需要および供給として登場するに至る。他方、資本は世界市場のかゝる作出によっ

て、ますます大工業に照応した工業原料、労働者あるいは資本家のための消費資料を商品として購売することにより、また大量に生産される工業製品を商品として販売することにより、価値および使用価値からみた蓄積を促進する。

資本が世界市場を作出することにより、外的な非資本制的な環境を、蓄積に照応した環境に転化するや、世界市場が今度は資本制生産の一般的環境をなすに至る。商品流通の世界的規模での拡大、生産物の商品への転化の促進は、市場のための商品生産を刺激し、喚起し、先進国と後進国の競争、後進国土着手工業の破滅、生産者の生産手段からの剝離を生ぜしめる。資本の作出する世界市場は、かくして、旧来の諸生産様式を自らの前提として維持するどころか、それらを解体せしめ、滅亡せしめ、従属せしめるのであって、今度は〝始源的蓄積〟を資本そのものが全世界にむかって強制することになる。

したがって、資本による世界市場の作出は、同時に資本関係の全世界へむかっての普及であり、資本による資本の宣伝——自己宣伝——である。かくして、資本制生産は、はじめに資本制社会を限界ずけていたところの国家の枠をこえるのであり、非資本制諸国家へむかって「発展（Übergreifen）」するのである。

マルクスは、この資本による資本の宣伝という宣伝的傾向（propagandistische Tendenz）を重視して、次のように『綱要』において述べている。

「〔資本は——岡田〕資本に立脚した生産、あるいは資本に照応せる生産様式を宣伝する傾向を持つ。世界市場を創造するという傾向は直接に資本そのものの概念のうちに与えられている。」（Grundrisse, S. 311）

「資本は従前のあらゆる社会的段階がたゞ人類の地方的発展としてのみ現象するところの、一社会段階を生産す

る。自然は〔かくして――岡田〕はじめて人間にとっての純粋な対象となり、有用性の物象となり、それ自身が権能として承認されることがなくなる。そして自然の独自の諸法則の理論的認識はそれ自身たゞ狡智として、〔すなわち――岡田〕それを人間の欲望に――それが消費の対象としてゞあれ、生産の手段としてであれ――従属せしめる狡智としてのみ現象する。資本はこの自らの傾向に従って国民的制限をのりこえ、偏見をのりこえ、同様に自然崇拝および伝来的な特定の限界内に自立的に閉じこめられた、既存の欲望および旧来の生産様式の再生産をのりこえる。資本はかゝるすべてのものに対して破壊的であり、不断に革命的であり、生産諸力の発展を、欲望の発展を、生産の多様性を阻止し、また自然と生産力の利用と交換とを阻止するあらゆる制限に対し破壊的である。」(Grundrisse, S. 313)

この、資本のそれ自身の諸制限を突破し、それとともに国家の制限をのりこえて自己を宣伝する傾向は世界市場を作出する。したがって資本制生産のまず確立した一国家――乃至若干の諸国家――から、国家の枠をこえて発展し、資本を宣伝し、全世界に普及せしめるのは資本の必然的傾向であって、資本制生産の全世界への普及、非資本制的生産諸関係の包摂・解体・従属の全過程こそ、資本に照応した世界像といわなければならない。

こゝにみるように、資本の作出する世界市場においては、自立的生産様式としての資本の全関連が前提されるのであって、ローザ・ルクセンブルグが説明するように、資本の非自立性が前提されるのではない。すでにみたように、資本が一つの自立的生産様式であり、それ自身の内的諸限界を持つということは、資本がつねにそれ自身の内的諸限界の内部でのみ運動するということを意味するものではない。そうではなくて、資本は一方では、生産力を無制限に発展せしめる傾向を持ちながら、他方ではこの発展は、たゞ資本価値の自己維持および増大の単なる手段にすぎな

い、という矛盾を内包するのであって、かゝる矛盾した生産様式として資本は不断に自らの内的諸限界を克服せんとし、それらを諸制限として突破するのである。

したがって、かくして作出された世界市場は、資本制生産様式の結果であり、資本にとってのみ固有のものであり、必然なるものである。[22] 世界市場は、資本が前提されるや、その歴史的前提としてあらわれたものとは、まったく異った姿態で登場するのである。景気の交替、週期的恐慌の世界市場の運動は、資本制生産様式にとってのみ固有な、それに必然な現実的運動形態である。いまや、かつて歴史的前提をなしていた世界市場は、この資本に必然なるものとしての世界市場の定在のうちに止揚されている。そしてこの世界市場が、今度は、資本制生産の全関連の「担い手」をなし、前提をなすのである。

経済学にとって、この世界市場——資本制生産様式の必然的産物である世界市場が、さきに単に歴史的前提として現われた世界市場とまったく異った意義を持つことはすでに明かであろう。資本にとってのみ固有なところの、資本の必然的産物をなすところの、資本の「生活環境 (Lebensatmosphäre)」(Das Kapital Bd. III, S. 132) をなすところの、資本の結果をなすとともに前提をなすところの世界市場は、経済学の対象として理論的に再構成されねばならない。

(註1) だから、市場ははじめから社会的性格を持っている。市場——競争の場面であるとともに商品流通の場面である——においては、競争を通して生産と消費の社会的性格が発揮される。Vgl. Das Kapital Bd. III, S. 220, Theorein. Teil 2, S. 501

(註2) Vgl. Grundrisse, S. 191.

(註3) 前節においては、『発達』における国外市場と、世界市場とを概念上区別のないものとして論じたが、国外市場とは一

国の立場からする市場の国内市場と国外市場の区別において主張される概念であって、世界市場という範疇とは一致しない。

(註4) シスモンヂ『新経済学原理』菅間訳　古典文庫版（上）九八頁。

(註5) Vgl. Das Kapital Bd. II, S. 520 ff.

(註6) Rosa Luxemburg; Die Akkumulation des Kapitals. Ein Beitrag zur ökonomischen Erklärung des Imperialismus; Gesammelte Werke Bd. VI, S. 266.

(註7) Ebd. S. 263.

(註8) Ebd. S. 262.

(註9) Ebd. S. 261.

(註10) Ebd. S. 261.

(註11) たとえば、山田盛太郎『再生産過程表式分析序論』参照。

(註12) Rosa Luxemburg; Gesammelte Werke Bd. VI, S. 278～9.

(註13) Ebd. S. 274～5.

(註14) この世界状勢の変化と理論的課題の発展の関連については次の説明が参考となろう。「かくして持ちきたされたところの新たな情勢――世界的戦争の必至の形勢――は、当然、それが理論的に闡明される以前にすでに実際上に感知された。そして次第に成熟してくるこの形勢の感知は、あらゆる方面に、もちろんマルキシストの間にも漸次に重大な注意を喚起せずにはおかなかった。それはインターナショナルの大会が戦争にたいする対策の問題を漸次に激烈な論争の中心としてきたことによって知られうるであろう。これらの論争を通じてわれわれは、戦争の問題に関連するかれらの見解のうちに三つの相異る傾向が次第に展開してきたのをみるのである。その一は一見明白な愛国主義的傾向であり、その二は空想的平和主義的傾向であり、その三は資本家的生産の矛盾の爆発としての戦争の必然性を認識すると同時に、かゝる戦争の中に資本家的生産の最後のカタストロフィをみいだそうとする傾向である。これらの中で最後のものがこの問題について最も積極的な関心をもったことはいうまでもない。それは主として、日露戦争を契機として勃発した一九〇五年のロシア革命の経験者、なか

んずくレーニンおよびルクセンブルグによって代表された。帝国主義の科学的分析の発展のために最も画期的な業績を寄与したのがこの二人であったことは偶然ではなかったのである。こゝにルクセンブルグの業績というのは、いうまでもなく彼女の有名な『資本蓄積論――帝国主義の経済的闡明のために一寄与』（一九一三年発行）をさす。」（久留間鮫造『恐慌論研究』四二～三頁。）

（註15） Rosa Luxemburg; Gesammelte Werke Bd. VI, S. 361.

（註16） Ebd. S. 380.

（註17） Ebd. S. 379～80.

（註18） 「……かくて、資本は、資本に特殊な制限を措定するとともに、他面、あらゆる制限をのりこえるが故に、生きた矛盾である。」（Grundrisse, S. 324）

（註19） 久留間・宇野・岡崎・大島・杉本編『資本論辞典』二〇九～一二頁　参照。「……他の規定は、その限界のなかにおいては、あるものは、あるものを自らをこえてのりこえせしめる矛盾であるということが内在的である、というあるものの不安（die Unruhe des Etwas）である。」（Hegel; Wissenschaft der Logik. Der Philosophischen Bibliothek Bd. 56 Bd. I, S. 115）「あるもののそれ自身の限界が、このように否定者――それは同時に本質的なものである――としてあるものから措定されるや、あるものの限界はもはや単に限界そのものではなくて、むしろ制限となる。」（Ebd. S. 119）

（註20） 岡田裕之「資本制生産の自己止揚と国家」『経済評論』一九六一年一一月号　所収　五三頁。

（註21） 資本家の個人的消費にしか入りこまない奢侈品の、輸入による低廉化もまた蓄積を促進する一要因となる。

（註22） 宇野教授は、経済学における上向を「諸階級」までに――あるいは「ブルジョア社会の内的構成」（理想的平均におけるまでに限定する。「マルクスは前に引用した〔『経済学批判』序説より――岡田〕ように『労働、分業、欲望、交換価値のような簡単なものから、国家、諸国民間の交換、世界市場にまでのぼってゆく経済学の諸体系がはじまった。この……方法はあきらかに、科学的にたゞしい方法である』といっている。しかし『資本論』自身もそうであるが、『商品』から始って『諸階級』……に終る理論体系は、『抽象的なものから具体的なものに上向する方法』としても決して『国家、諸国民間の交換、世界市場にまでのぼってゆく』ものではない。理論的に setzen される『具体的なもの』は、マルクスの所謂純粋

の資本主義社会として一社会をなすものであって、他の一社会との関係をまで setzen しうるわけではない。」（宇野弘蔵『マルクス経済学原理論の研究』一五頁。）しかしながら、「ブルジョア社会の国家をこえての発展」は資本制生産の必然であって、世界市場の作出――歴史的前提としての世界市場の資本による措定――を資本の必然的傾向として承認していたからこそ、マルクスは「世界市場」への上向を主張したのである。

三、世界市場の具体的・歴史的性格

前節においてみた如く、世界市場は歴史上の単なる偶然的事象ではなく、資本制生産様式の必然的産物であって、経済学の理論的に再構成されるべき対象をなす。

それでは、世界市場はいかなるものとして経済学の理論的対象であるのか。

世界市場の具体的性格という場合、それは単に具体事実的なものとして語られるべきでなく――その場合には世界市場の必然性は否定され、その研究は歴史事実の単なる実証的研究に委ねられる――資本制生産様式の全運動の、その内的諸関連のうちに求められなくてはならない。世界市場の具体的性格は、理論的再構成の全関連において持つ具体的性格であって、《単なる歴史》の持つその具体的性格ではない。マルクスの『経済学批判』計画はこの関連を根本的に明かにしたものである。

世界市場は、資本制生産様式の全関連において、「資本制生産の基本的諸規定」が抽象であるのに対して、最も具体的であるもの、として、経済学の理論的対象をなす。「世界市場」の具体性は、『経済学批判』計画における、上向への媒介諸項の存在において示されている。

すなわち、いまその計画を、その変例等々の諸問題に立入ることなしに、概括的に示すならば、全体は「一、資

本。二、土地所有。三、賃労働。四、国家。五、国際関係。[1] 六、世界市場。」から成立ち、「一、資本。二、土地所有。三、賃労働。」はブルジョア社会（資本制社会）の「内的構成」をなし、この「内的構成」の規定者は「資本」であって、この「資本」はふたゝび「一、資本一般。二、競争。三、信用制度。[2]」から成立つ。

この上向系列を、いま説明上二つに分けるならば、「内的構成」に対する、「国家」→「国際関係」→「世界市場」への上向系列と、「資本」内部の「資本一般」に対する、「競争」→「信用制度」の上向系列が存在する。[3] もちろん、この後者の上向系列は全体の大上向系列、すなわち「内的構成」→「国家」→「国際関係」→「世界市場」の部分をなすにすぎない。「資本一般」→「競争」→「信用制度」にあっては、資本制生産の専一的支配が前提されるのであって、いまだ資本制社会の国家の形態での総括も、国家をこえてのその発展も問題となりえず、むしろこの上向に前提されている。

「資本制生産の基本的諸規定」は、「資本一般」→「競争」→「信用制度」の上向系列においては、ほゞ「資本一般」に照応するものである。[4]

「資本一般」にあっては資本の一般的本性は明かにされるけれども、その一般的本性が諸資本の相互作用——競争——を通して貫徹する過程は明かにされないし、資本自らの作り出す、その内在的制度である信用制度によって媒介された、一般的本性の貫徹の具体的運動も明かにされない。いうまでもなく、競争および信用制度に媒介されない資本の運動はありえず、この運動諸形態を離れては資本の一般的諸傾向もありえない。だが、この全体を理論的に明かにするためには、まずかゝる運動諸形態を捨象して、資本の一般的本性が認識されねばならない。しかし、この認識は経済学のそこまでの終了を意味するのではなくて、むしろ、新なる出発点を与えるものであって、そこから「競

争」および「信用制度」への上向がはじまらなければならないのである。これは、さきにみたように、資本制生産が自らの内的諸限界を注意深く、小心翼々として守るどころか、反対にそれらを不断に克服しなければならず、諸制限として突破せざるをえないという、資本制生産様式という矛盾の現実的運動に照応した理論関係なのである。

資本の一般的本性と競争の関連をとってみよう。たとえば、相対的剰余価値を生産する、ということは資本の一般的本性に基くものであるが、この生産はつねに諸資本間の競争を通して行われる。競争する個々の資本家にとっては、生産方法の改善に際して労働者の生活資料を低廉化し、もって相対的剰余価値を生産するということは、直接の目的としては意識されない。彼等は超過利潤を求めて競争戦を遂行するのであって、改善された生産方法が一般化し、経過的な超過利潤が消滅し、労賃が低落して相対的剰余価値が生産されるのは、競争する個々の資本家の意識からは独立した一般的結果にすぎない。(5)

利潤率低落法則の貫徹においてもそうである。たしかに利潤率の低落は、スミスの説明する如く競争によって生ずる法則ではなく、(6)まず競争から独立した一般的法則として把握されなければならないが、しかしながら、相対立する諸資本の無政府的な競争は、蓄積の諸要因の対立・抗争・衝突において、この傾向を貫徹せしめるのであって、循環の特定の段階において剰余価値率の低落、利潤率の急激な低落を生ぜしめるものはこの競争である。

競争する諸資本の行為を通して、一般的諸法則が強制される、ということの内には、競争によって内的諸制限が不断に突破される、ということが含まれている。資本制生産の諸制限を突破せしめる、ということは、信用制度の果す役割において更に著しい。マルクスは信用制度の役割を次の如く強調する。

「信用業が過剰生産および商業的過度投機の主要槓杆として現象するとすれば、それはけだし、再生産過程——

これはその本性上弾力的である――がこの場合には極限にまで強行されるからにほかならず、しかも再生産過程が強行されるのは、けだし社会的資本の一大部分がその非所有者、すなわち、自分の私的資本の制限を小心翼々として考量する所有者が自ら機能する場合とはまったく異なり、向うみずなことをする非所有者によって充用されるからである。このことによって明かとなるのは、資本制生産の対立的性格に基く資本の価値増殖は、特定点までしか現実的で自由な発展を許さず、したがって事実上では生産の内在的な桎梏および制限をなすが、この桎梏・制限は信用業によって絶えず突破される、ということにほかならない。」(Das Kapital Bd. III, S. 482)

競争および信用制度という資本の一般的本性の貫徹の、こうしたメカニズムはまったく資本に照応したメカニズムであって、これは資本制生産の内在的諸制限を突破せしめ、かくしてその突破に対する激烈な反撃を必然ならしめる槓杆として作用するのである。

資本制生産様式の現実的運動が、それ自身において、理論的に獲得されるならば、今度はその作出する世界市場の生活環境における、その一層具体的な――最も具体的な――諸運動が問題とされねばならない。

ところで、「内的構成」→「国家」→「国際関係」→「世界市場」への上向においては、「内的構成」を問題とする場合の理論上の想定が変化する、ということが看過されてはならない。前節においてみたように、「世界市場」はまず「ブルジョア社会の国家をこえての発展」であって、この「発展 (Übergreifen)」には資本の自立性が前提されねばならず、〃ブルジョア社会〃の〃ブルジョア社会〃としての敍述――「内的構成」が前提されなくてはならない。そしてこの、ブルジョア社会の「内的構成」においては、社会における資本制生産の専一的支配が前提されなくてはならないのであり、国家あるいは諸国家の定在が捨象されなくてはならないのである。こうした想定なしには、一般

に、資本制生産様式の基礎的諸範疇の認識は問題となりえなかったのである。マルクスもまた、『資本論』におけるこの想定を次のように明言している。

「こゝで輸出貿易――すなわち、それに媒介されて一国民が奢侈品を生産または生活手段に転態し、またその逆のことをもなしうる輸出貿易を捨象する。研究の対象をその純粋性において、攪乱的な附随的諸事情から自由に捉えるためには、我々はこゝでは全商業世界を一国とみなし、また資本制生産が到るところに確立してあらゆる産業部門を征服したものと前提せねばならぬ。」(Das Kapital Bd. I, S. 609)

だから、「内的構成」を問題とする限りは、この想定は、一貫して固執されなければならないのである。ローザ・ルクセンブルグがマルクスの社会総資本の再生産と流通の理論を修正する場合、彼女は問題の要請するこの想定の必要をみおとしているのであって、「内的構成」が資本制生産の専一的支配を前提として敍述されなければならない、ということを見失っているところに、今度は世界市場の必然性の問題を世界市場の必然性の問題として提起できなかった重大な理由があったのである。

「ブルジョア社会の国家をこえての発展」にあっては、資本制生産様式の確立、その自立性は前提されるが、すでに〃全商業世界を一国とみなし、また資本制生産が到るところに確立してあらゆる産業を征服した〃という想定は成立たない。「ブルジョア社会の国家をこえての発展」において前提されるのは、諸国家の定在と、資本制生産の確立した一国家乃至若干の諸国家の、国家的制限をこえての、非資本制的な、資本制生産の未確立の大多数の諸国家への資本制社会の発展、という想定である。こゝでは〃全世界一国家〃も、あるいは〃孤立した一資本制社会〃も、〃到るところにおける資本制生産の完全な征服〃も想定されない。

資本制生産様式は、繰返すまでもなく一たび確立するや、自らの諸制限を突破しつゝ国家的制限をものりこえて世界市場を作出し、それを通して非資本制的諸関係を包摂・解体・従属せしめ、資本によってそれを代置するという必然性を有する。この傾向を明かにするためには、また、この必然性の貫徹における資本の諸運動を明かにするためには、そして、世界市場の問題を世界市場の問題として取扱うためには、経済学の上向の過程における想定のこの転化を確認しなければならない。

したがって、世界市場を問題とするのに、「内的構成」において必要であった想定を、「内的構成」にとっても不必要なものとして否定することは誤りであるが、この問題に対してもなおそれまでの想定を固執するならば、世界市場の問題は問題としても消滅してしまうのである。

〃全商業世界〃が依然として一国をなし、しかも資本制生産の全領域・全部門の〃完全な征服〃が前提されるならば、いかにして「ブルジョア社会の国家をこえての発展」の問題が、世界市場の問題が生じえようか。だから人は、世界市場を問題にとりあげる場合、すでに全商業世界を一国とみなし、到るところで資本制生産が確立してしまった、という想定を捨てゝいるのであって、こゝでこの想定の転化を充分に意識しないと、ローザ・ルクセンブルグのように、『資本論』を誤解するばかりでなく、世界市場の問題を世界市場の問題として明確に提起できない、ということになるのである。

「内的構成」から、すゝんで「ブルジョア社会の国家をこえての発展」を経済学が取扱うのは、資本制生産様式の全運動に照応するものであって、単なる抽象——頭脳の単なる産物 (Hirngespinst)——ではない。

まずはじめに「内的構成」をそれ自身において考察して、しかるのちに「ブルジョア社会」をその全世界へむかっ

ての宣伝・普及において考察する、ということは、決して資本制生産様式の自立的性格を損うものでもなければ、また資本制生産様式の全運動過程に、それに無縁な〝不純なもの〟を持ち込むことでもない。資本制生産の一般的諸法則は、世界市場という資本の生活環境において、はじめて具体的に自己を貫徹する。だからこそ、世界市場を現実の出発点としながら、分析によって「内的構成」に到達することができ、それを敍述することができるのであり、他面、「内的構成」から「ブルジョア社会の国家をこえて発展——世界市場」へ上向することができるのである。

「資本制生産の基本的諸規定」は、一般的にいえば、「内的構成」の〝理想的平均における敍述〟に照応する。「内的構成」が前提されれば次いで「国家」が、それに次いで「国際関係」が明かにされなければならない。(7)「世界市場」は、「資本一般」から「競争」「信用制度」の媒介を前提とし、また「内的構成」から「国家」「国際関係」の媒介を前提とするのであって、これらの媒介諸項を通すことによって、諸規定の綜合として、「世界市場」は真に具体的である。

世界市場の具体的性格は、だから、資本制生産様式の諸規定の綜合としての、概念的な意味における具体的性格であるといわなければならない。資本制生産の全矛盾が綜合的に運動し、恐慌において集合的に爆発する——かゝる運動を必然ならしめるものとして、かゝる運動の担い手として、世界市場は具体的である。しかして、この具体的性格は、「世界市場」が『経済学批判』計画の上向の終点であることにおいて語られているのである。

さてこゝで、世界市場の具体的性格は、こゝにみるように、それが諸規定の綜合であるということによって主張されるのであるから、世界市場の具体的性格と相並んで、その歴史的性格が主張されるということは、自己矛盾であるように思える。すでに繰返し強調した如く、世界市場の具体的性格はたゞ資本制生産様式の全運動の内的諸関連にお

いて成立つのであって、それは《単なる歴史》の単なる歴史事実的性格を容れないものであるからである。《単なる歴史》を論ずる限りでの歴史的性格は、こゝに筆者の規定する具体的性格と両立しえない。それでは、世界市場の歴史的性格ということは誤った主張であって、その具体的性格のみが強調されるべきであろうか。

こゝにおいて『発達』の第二論点の検討があらためて行われなければならなくなってくる。それというのは、『発達』第二論点においてレーニンは、資本制生産様式の歴史的前提としての世界市場の歴史的性格についてゞはなく、ほかならぬ、資本制生産様式の結果としての世界市場の歴史的性格を強調していたからである。検討のために、第二論点の要点を想起すれば、それは次の如くであった。

「これに反して資本家的企業は不可避的に、土地所有体、地方市場、州、それからまた国家の境界をこえる。しかして国家の孤立性と閉塞性はすでに商品流通によって破壊されたから、おのおのの資本家的産業部門の自然的傾向は、それらを国外市場を捜索する必要へと導く。かくの如くにして、国外市場を捜索する必要はナロードニキ派＝経済学者達が好んで描出するように、決して資本主義の破産を証明するものではない。まったく反対である。この必要は、経済制度の旧来の孤立性と閉塞性（したがってまた精神および政治的性活の狭隘）を破壊するところの、世界のすべての国を単一の経済的全体へと結合するところの、資本主義の進歩的、歴史的働きを明白に示すものである。」

これは、明かに資本制生産の歴史的前提である限りでの世界市場に関する主張ではなく、資本制生産の必然的産物としての世界市場に関してなされている主張である。そしてレーニンは、この関連における世界市場についても「その歴史的性質」を主張するのである。彼のこの主張を、第一の論点の場合と同じ意味において、《単なる歴史》の持

つ歴史的性格として斥けることはできない。

しかも、彼が世界市場の作出において示される、資本制生産の歴史を進歩せしめるという進歩的・歴史的働きを主張するとき、我々はその主張が、マルクスのいう資本の宣伝的傾向——あるいは、資本の文明開化的傾向（影響）——と一致していることを見出すが故に、なおさらそうである。マルクスによれば、資本の宣伝的傾向とは、「国民的制限をのりこえ、偏見をのりこえ、同様に自然崇拝および伝来的な特定の限界内に自立的に閉じこめられた、既存の欲望および旧生産様式の再生産をのりこえる。資本はかゝるすべてのものに対して破壊的であり、不断に革命的であり、生産諸力の発展を、欲望の発展を、生産の多様性を阻止し、また自然と生産力の利用と交換とを阻止するあらゆる制限に対し破壊的である。」ということであった。マルクスはこの同じ事柄を、資本の文明開化的傾向（影響）とも述べている。

「……流通の諸前提を、〔すなわち——岡田〕それ自身の生産上の中心を、あらゆる点で形成し、この諸点を自らに同化するのは、すなわち、資本制生産に転化するのは、資本の一般的傾向である。かゝる宣伝的（文明開化的）傾向——propagandistische (zivilisierende) Tendenz——は資本にとってのみ、従前の生産諸条件と区別される資本にとってのみ固有である。」(Grundrisse, S. 441)

「かくして、資本に立脚した生産は、一方では普遍的産業（労働）——すなわち剰余労働、価値増殖労働——を創造する如く、他方では自然および人間の諸属性の一般的利用の体系を、一般的効用の体系を創造する。——そして、その担い手としての科学そのものは、あらゆる自然的・精神的諸属性と同じく現象するが、他面社会的生産と交換のこの範囲の外では、何ものもそれ自体崇高なものとしては、それ自体正当なものとしては現象しない。かく

して資本は、はじめてブルジョア社会を作り出し、自然の普遍的取得と、社会成員による社会的関連そのものの普遍的取得を作り出す。こゝに資本の大なる文明開化的影響（the great civilising influence of capital）がある。」（Grundrisse, S. 313）

資本制生産が「国家をこえて発展し、世界市場を作出することによって、旧来の諸生産様式――それらは、たゞ地方的な狭隘な限界に閉じこめられており、生産力のきわめて極限された、微々たる発展しか生ぜしめない――を包摂し、解体し、従属させ、資本制生産をもってそれらを代置せしめ、自然の利用、生産力の尨大な規模での発展を生ぜしめる、ということは、こゝにマルクスもレーニンも一致して強調する如く、資本の歴史的に進歩的な作用であり、旧来の生産様式に対して持つ、資本制生産様式の歴史的に進歩的な作用の発現である。資本による世界市場の作出は、資本の必然であるとともに、資本の歴史的に進歩的な作用の実証であり、実現である。

こゝでは、資本制生産の自立的生産様式の内的諸関連は、歴史と対立するものとしては現われない。世界市場を作出するということにおいて表現され、実現される資本制生産の歴史的作用は、まさに、歴史的に特殊な生産様式としての資本の自己顕現にほかならない。世界市場を作出するという資本の歴史的作用、あるいは、この作用によって作出された世界市場の持つ歴史的性格は、資本制生産様式そのものの歴史的性格を表現するものである。

しかしながら、世界市場の歴史的性格において示される資本の歴史的性格は、単にこれのみにはとゞまらない。資本制生産様式は〝生きた矛盾〟として、自らよびおこすところの生産力の無制限的発展と不断に衝突におちいるところの生産様式として、それ自身一つの自立的生産様式であると同時に、駆つて自らを止揚するものである。自己を再生産すると同時に駆って自らを止揚するという、かゝる〝生きた矛盾〟として把握されてはじめて、歴史的に特殊な

生産様式としての資本制生産様式の根本的特質が把握される。

「一方では、前資本制的諸段階は単に歴史的な諸前提として、すなわちすでに止揚された諸前提として、現われるが、かくて生産の現在の諸条件は、自らを止揚する諸前提として、したがって、新社会状態にとっての歴史的諸前提を措定する諸前提として、現われる。」(Grundrisse, S. 365)

資本制生産の自己止揚は新社会——共産制（乃至社会主義制）社会——を措定するものとして同時に一つの歴史的過程である。

資本制生産様式そのもののこの歴史的性格は、世界市場においてはじめて成熟した姿において明かにされるのであり、たゞ世界市場を通してのみ完全に発現されるのである。したがって世界市場を作出する、ということは「資本制生産様式の歴史的任務 (die historische Aufgabe der kapitalistischen Produktionsweise)」(Das Kapital Bd. III, S. 482～3) である、というべきなのである。

「だから資本制生産様式は、物質的生産力を発展させ、これに照応する世界市場を創造するための歴史的手段だとすれば、それは同時に、かゝる歴史的任務とそれに照応する社会的生産諸関係との間のたえざる矛盾である。」(Das Kapital Bd. III, S. 279)

世界市場が諸規定の綜合をなす、ということは、資本制生産の全矛盾がそこにおいて集合的に爆発し、恐慌の反復が移行を強制し促進する、ということを示すものである。世界市場は前提の現実的措定であると同時に前提の止揚として、移行に直結する。(8)

この関連は、すでにみた如くマルクスにおいて明瞭に主張されている。すなわち、彼において「世界市場」は、は

じめに「ブルジョア社会の国家をこえての発展」であり、次いで「諸恐慌」であり、次いで「交換価値に立脚する生産様式および社会形態の解体」であり、「社会的労働としての個人的労働の現実的措定およびその逆〔すなわち、個人的労働としての社会的労働の現実的措定――岡田〕」として規定されているのである。[9] このように、世界市場が具体的であると同時に歴史的である――あるいはむしろ、具体的であることによって歴史的であるのは、資本制生産様式の全運動の客観的関連に基くものである。

上向の終点が出発点への復帰をなし、同時に全体の止揚をなすというこの関連は、世界市場恐慌の二重の性格において最も明瞭に示される。世界市場はさきにも述べたように、資本制生産の内的諸限界が不断に克服され、諸制限として不断に突破され、かくしてこの突破に対する反撃が激烈な形態――恐慌――で生ずる具体的な場であり、「ブルジョア社会の全矛盾」が「集合的に爆発」する場であって、そこでは私的労働と社会的労働の矛盾は根拠を与えられ、発展せしめられ、完全に成熟した姿で運動する場を与えられ、かくしてその頂点に達している。

「ブルジョア的生産の全矛盾は一般的世界市場恐慌においては集合的に爆発し、特殊的恐慌（内包および外延からいって特殊的な）においては単に散在的、孤立的、一面的にのみ爆発する。」(Theorien. Teil 2, S. 530)

世界市場恐慌の週期的爆発は、資本制生産様式の諸矛盾が、たゞ一時的に、暴力的にしか解決されえないことを示すものである。だから恐慌は、破壊された内的諸統一の暴力的解決として、資本制生産様式の自己維持とその新なる発展を表現するものであるが、他面、諸矛盾がたゞ暴力的に、一時的にしか解決されないということは、資本制生産様式が止揚されなければならない、ということを表現するものである。恐慌のこの二重の性格は、マルクスによって強調されてきたところである。

「截然たる矛盾、恐慌、痙れんにおいて社会の生産力の発展の従来の生産諸関係への不適応が表現される。資本の暴力的絶滅、資本にとっての外的な諸関係によってではなく、資本の自己維持の条件としての資本の暴力的絶滅は、資本に去りゆくべきことを告げ、社会的生産のより高次な状態に席をゆずるべきことを告げる最も明白な形態である。」(Grundrisse, S. 635~6)

「もちろん、かゝる諸矛盾は爆発に、諸恐慌——そこにおいてはあらゆる労働の一時的止揚および資本の大部分の絶滅が、資本が自殺を犯すことなくその生産力を完全に発揮せしめる点に、ふたゝび資本を暴力的におしもどす——に導く。とはいえ、この規則的に反復する破局はより高度な規模での反復に導き、最後には資本の暴力的転覆に導く。」(Grundrisse, S. 636)

週期的恐慌、景気循環——恐慌の反復を通しての止揚のこの〝強請〟[10]は、さしあたり、全過程を通しての、私的所有の内部での私的所有の止揚の措定——したがってまた、私的労働と社会的労働の矛盾の、敵対的形態における止揚の措定——において現象する。そしてこの敵対的形態における止揚が、資本そのものの現実的止揚に直結する。世界市場のこの運動は、資本制生産の自己発展、自己維持のみでなく、その自己止揚を表現するものであって、世界市場においてこそ、資本制生産そのものの歴史的性格が現実に実証されるのである。

「世界市場」が経済学の上向の終点をなす、ということにおいて、世界市場の具体的性格が表現されているとするならば、その歴史的性格もまた、同時にそこにおいて表現されているのであって、世界市場の歴史的性格は、すでにその具体的性格と対立しないばかりでなく、まさに、それが具体的であるという性格において示されているのである。世界市場は資本制生産の内的諸関連の内部において具体的であるが、まさにこの具体的性格において、それは歴

史的である。『発達』第二論点においてレーニンの指摘した世界市場の歴史的性格は、これらの諸関係を補足することによって承認することができる。

古典派経済学に対してマルクスが画期的に優れているのは、彼が資本制生産様式を単に一つの自立的生産様式として把握したばかりでなく、それを一つの歴史的に特殊な生産様式として、世界市場恐慌という諸矛盾の爆発を不可避ならしめるものとして、それによって、自己自身を止揚せざるをえないものとして、把握した点にある。「世界市場(移行)」への上向の志向こそ、マルクスにおける「資本制生産の基本的諸規定」を特徴ずけるものである。[11]

これに反し、リカアド――彼をもって古典派経済学を代表せしめるならば――は、世界市場恐慌(移行)を承認しなかったのであり――事実、彼は週期的世界市場恐慌の爆発を知ることなくして死んだ[12]――その想定のもとで、資本制生産の基本的諸規定を敍述したのである。リカアドのこの敍述が古典派経済学の内部ではきわめて優れたものであるとはいえ、それがいかに偏狭な、不正確な、とらわれたものであったかは説明するまでもあるまい。

ローザ・ルクセンブルグは、このリカアドとは反対に、資本の没落を承認し、それを世界市場の問題であると考えるのであるが、彼女はこの移行を論証するにあたって、資本制生産様式の自立性を否定し、その非自立性を全立論の基礎にすえる。この点において彼女は、単にマルクスから後退しているばかりでなく、リカアドからさえ後退している。世界市場――移行と資本制生産の基本的諸規定の関係は、たゞマルクスの方向にしたがってのみ、正しく把握されるのである。[13]

「世界市場」へのかゝる指向において資本制生産の基本的諸規定を敍述したことは、マルクスとして正当なことであった。彼は「資本制生産の基本的諸規定」を与えるために、この上向を指向しつゝ、かつこの上向におけるその他

の部分を捨象したのである。彼にあっては、『経済学批判』計画の全部分が同等に重要であったのではない。彼の全研究の「精髄」(Briefe, S. 113) は「資本制生産の基本的諸規定」に照応する『資本論』にあったのであって、とくに計画後半ははじめから、たゞ梗概にとゞめるべきもの、とされていたのである。[14]

「世界市場」が経済学の中心問題となるに至ったのは、エンゲルスが『資本論』を公刊してからである。だが、「世界市場」がマルクス死後問題の中心におしだされてきたのは、直接的な緊急事態、すなわち帝国主義世界体制の成立と、その矛盾の世界戦争という形での爆発、あるいはそれの接近、という事態によるものであった。そこでは「世界市場」は経済学の直接の問題となったのであつて、かってのように、たゞそこへ上向すべきものとして一般的に問題となったのではなかった。一方では「資本制生産の基本的諸規定」は『資本論』という形ですでに科学的に獲得されたものとして存在し、他方では世界市場の諸矛盾が帝国主義の世界体制を成立せしめるに至ったという新なる事態こそ、一九世紀末から二〇世紀初頭へかけての、主としてドイツ、ロシアにおける労働者階級の理論家達の直面した特殊な事情であったのである。

マルクスにおいて経済学の基本部分は完成された。しかしながら、「世界市場」の領域はなお経済学の残す領域であって、世界市場とそれに関連する諸問題は解決されるべき理論上の問題として提起されねばならない。

(註1) 「国際関係」は『経済学批判』序言では「対外取引」(「外国貿易」)である。けれども、「対外取引」(「外国貿易」)では、商品輸出入のみを表現するものと受けとられるおそれがある。輸出入は資本制生産の経済的な国際関係の最も基礎的な関係をなすとはいえ、なおその部分にすぎない。こゝではより一般的な意味を持ちうる「国際関係」——「生産の国際的関係」の意味——を採った。(Vgl. Grundrisse. S. 29, Grundrisse. S. 175) なお、附記すれば、外国貿易は国外市場とは異った範疇であって、『発達』においてレーニンはこの区別をとりたてては行っていない。

（註2）「資本」部分の内部編成は、「資本一般—競争—信用」の構想（Briefe, S. 113～4），（Grundrisse, S. 186）、「資本一般—競争—信用—株式資本」の構想（Briefe, S. 87～8）その他が存在するが、種々の構想の基礎として、本論では「資本一般—競争—信用」を採る。

（註3）「ブルジョア社会の内的構成」部分の内部の上向、すなわち「資本—土地所有—賃労働」あるいは「資本—賃労働—土地所有」等々について問題が生じえようが、ブルジョア社会の内的構成の三大部分の相互関連およびその内部での資本の規定的役割を確認するにとゞめて、この問題には立入らない。

（註4）こゝで、ほゞ、というのは、当初計画で「資本一般」には属さなかった事柄が『資本論』——「資本制生産の基本的諸規定」に照応する——には入りこみ、組み込まれている、という事情からいうのである。たとえば、利潤の平均利潤への転化、社会総資本の再生産と流通等々。

（註5）Vgl. Das Kapital Bd. I, S. 331.

（註6）スミス『国富論』岩波文庫版　大内訳　㈠　一七三頁　参照。マルクスは利潤率低落傾向に関するスミスの命題を次の如く批判するが、適切である。「A・スミスの命題は、競争——資本の資本に対する行為——において資本に内在する諸法則、諸傾向がはじめて実現されるという限りにおいては正しい。だが、彼がそれを理解している意味においては、すなわち競争があたかも資本にとっては外的な、外から持ちこまれた、資本にとっては固有でない諸法則を強制するかの如く理解している、という意味においては誤っている。競争が全産業部門における利潤率すなわち平均利潤率を恒常的に圧し下げうるのは、たゞ一般的な低落が、そして一般的な恒常的な法則として作用する利潤率の低落がすでに競争の以前に、そして競争に関連することなしに把握されている場合にだけである。競争は資本の内的諸法則を遂行する。競争は内的諸法則を個々の資本に対する強制法則たらしめるが、それらを説明しない。競争は資本に内在する諸法則を実現する。」（Grundrisse, S. 637～8）

（註7）岡田裕之「資本制生産の自己止揚と国家」『経済評論』一九六一年一一月号　所収　参照。

（註8）前掲論文　前掲誌　六〇～一頁　参照。

(註9) Vgl. Grundrisse. S. 139, Grundrisse. S. 175, Grundrisse. S. 78～9.
(註10) Vgl. Grundrisse, S. 139.
(註11) 「世界市場」への上向の方向そのものは、重商主義経済学に対する批判として古典派経済学において存在する。
(註12) 「リカアド自身はもともと、恐慌については、すなわち、一般的な、生産過程そのものから生ずる世界市場恐慌については、何も知らなかった。……」(Theorien. Teil 2, S. 493～4)
(註13) だから、『資本論』における全範疇は、たゞ「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、それの否定の、それの必然的な崩壊の理解をも含み、どの生成せる運動をも運動の流れにおいて、したがってまた、それの転変する側面から理解」(Das Kapital Bd. I, S. 18) するという方法によって理論的に獲得される以外にはなかったのである。
(註14) 一八五八年三月一一日、すでにマルクスはラサールに宛てゝ次のように書いている。「全体が分たれる全六冊のすべてを一様に仕上げることは、決して私の意図するところではない。そうではなくて、後半三冊についてはむしろ単に梗概を与えるべきであって、本来の経済〔学〕的根本展開を含む前半三冊についてこそ、詳論はあらゆる所で避けらるべきではない。」(Briefe, S. 87)

附　記

文中、Grundrisse, Theorien, Kritik, Briefe はそれぞれ、Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Theorien über den Mehrwert, Zur Kritik der politischen Ökonomie Erstes Heft, Briefe über "Das Rapital" の略記。